

1 / 16 の牝奴隷



濠門長恭

目次

[序文]	- 3 -
1. 異母姉は奴隷	- 4 -
2. あばかれた血筋	- 28 -
3. 白人から奴隷に	- 70 -
4. 父親への性奉仕	- 104 -
5. 鎖の貞操帯	
6. 競売と自由	
7. 娼館への罣	
8. 娼館の日常	
9. 強制された背徳	
10. 母娘狂艶	

後書き

章単位で「しおり」を設定しています。閲覧時にご利用ください。

[序文]

奴隷制度は、運用のあり方によってはそれほど非人道的ではないのかもしれない。古代ローマでは、奴隷とは諸々の事情により自由を制限された**人間**だと理解されていた。所有者の気まぐれで殺されたり、苛酷な労働を課される例もあったが、家族に準じた扱いを受けることも珍しくはなく、有能な者には立身出世の道さえ開かれていた。

一方、特定の人種を自分たちより劣るとする人種差別は、人道の対極に位置づけられる。ことに、有色人種はもの言う**家畜**にすぎないという思想が宗教で正当化されたとき、悲惨な状況が現出することは想像に難くない。

人種差別と奴隷制度を是認する国家が、もしも近代に存在していたらという仮定に基づいたこの物語が、読者の心に非人道的な制度への嫌悪を醸成し得たとしたら、作者は付言を要さない。

1. 異母姉は奴隷

一面の緑におおわれた丘の稜線を二頭の馬がのんびりと進んでいる。

先に行く馬には、仕立ての良い服に身を包んだ青年。薄茶色の髪をきっちりと固めて紳士を気取っているが、陽に焼けた顔に散る雀斑が、彼の年齢を物語っていた。

後ろの馬には、肩まで垂れた金髪を白いリボンで無雑作に束ねた乗馬服姿の少女。身体にぴっちり合った服が、実際以上に胸の盛り上がりと尻の丸みを強調して、年若い少女を青年と同じくらいの年齢に見せかけていた。

二頭の後ろには、それぞれの女中が徒歩で従っている。

小さな林にさしかかったところで、乗馬服姿の少女——エレオノーラ・グレイが青年に呼びかけた。

「トミィ、ここでランチにしましょう」

トーマス・ミラーが馬からおりてエレオノーラに近づいたが、彼女はいつもの習慣で、さっさと馬からおりてしまった。差し伸べた手をトーマスが所在無げに引っ込めるのを見

て、エレオノーラは淑女らしくふるまう機会を逃がしたと気づいたのだが、もうどうしようもなかった。

二人の女中は大きなシートを木陰に広げて、ピクニックボックスから出した食器を並べていった。

エレオノーラは、自分が指図して作らせた料理を鞍に提げたバスケットから取り出して――不機嫌な表情になった。

「メグ、ワインを忘れたの？」

エレオノーラ付きの女中、二十歳になる奴隷娘のメグは、首を横に振った。

「置いてきました。殿方とふたりきりでワインをお飲みになるのは、まだ早すぎるのではないかと奥様をご心配でしたので」

「ワインを置いていくようにと、ママがおまえに命じたのね？」

「いいえ。わたしも、奥様のお考えと同じでしたので」

「なんですって!？」

エレオノーラは癩癩玉を破裂させた。

「つまり、おまえは主人の命令に背いたのね」

「お父様も同じようにお考えだと思いますよ」

「お父様ですって……!？」

メグは、エレオノーラの父が奴隷女に手を付けて産ませた子だった。血の上では異母姉にあたるのだが、肌の色がやや薄いというだけで、白人の形質は表われていない。

エレオノーラには、この奴隷娘が何かにつけて自分の姉のように振る舞うのが気に食わなかった。黒人も魂を持った人間だとか言ってママが甘やかすから、つけ上がるんだ。今日こそはけじめを示してやろうと、エレオノーラは決心した。

「あたしのパパは、おまえのなんなの？」

「それは……もちろん、ご主人様です」

「自分の父親だなんて、思っていないでしょうね？」

メグが、はっとした顔でエレオノーラを見た。妹を心配するあまり、なれなれしくし過ぎたと悟った。

「スカートをたくし上げて、そこへ四つん這いになりなさい」

エレオノーラは乗馬鞭を手にして立ち上がった。

「お許してください、お嬢様。これからは気を

つけます」

ひざまずいて両手を胸の前で組むメグを見下ろして、エレオノーラは鞭の先端でぴしゃりと頬を叩いた。

「まだ命令に従えないの？ それなら、いいわ。パパに言いつけて、ジョッシュに手加減無しの折檻をしてもらうから」

ぶるっと、メグは身震いした。奴隷監督のジョッシュは、乗馬鞭など使わない。彼が本気で懲罰用の巻き鞭を振るえば、一発で肌が裂けてしまう。

メグはスカートを腰の上までまくって、草原に両手をついた。

「トミィ。この奴隷娘の下穿きを脱がすように、あなたのメイドに言いつけてくださる？」

ジョッシュで脅さないと命令に従わなかったメグへの罰は、衣服の上から鞭打つくらいでは足りない。エレオノーラは、ますます怒りをつのらせていた。

「タラ……」

トーマスは顎をしゃくって、自分の奴隷娘をうながした。タラはちょっとだけ哀しそうな顔になって、メグの下穿きを膝までずり下

げた。草原のただ中に晒された豊満な褐色の双丘は、ひどく場違いで扇情的だった。

エレオノーラが右腕を高々と振り上げて、乗馬鞭を双丘に叩きつけた。

パッシン！

乾いた音が春のそよ風を切り裂いた。

メグはぴくっと肩を震わせただけで、呻き声も出さない。乗馬鞭には、馬を傷つけない工夫がされている。その鞭を振るっているのは、水汲みさえもろくにしたことのない非力な少女だ。瞬間的な痛みはあっても、肉体へのダメージは無いに等しい。

それはエレオノーラにもわかっている。わかっているから、鞭を振り下ろすたびに腹立たしさがつのっていく。

二十発も鞭打つと肩が痛くなって、メグは鞭を放り出した。

「これくらいにしといてやるわ。今度逆らったら、本当にジョッシュに頼むからね」

荒い息を吐きながら、なんとか威厳を取り繕うエレオノーラ。メグはといえば、褐色の肌に不鮮明な鞭跡を幾つか描かれて、けろりとしていた。

「奴隷なんかほっというて、食事にしよう」

トーマスがシートに陣取って、恋人（にしたいと思っている娘）を手招いた。

「そうね。あたしも、すっかりおなかが減ってしまったわ」

エレオノーラも恋人（になってくれたらいいなと思っている青年）の隣に座った。

女中たちは、邪魔にならないようシートから一ヤードばかり離れて後ろに座っている。

恋人候補同士のランチは、しごく淡々と進んだ。エレオノーラは料理にいろんな工夫を凝らしていたが、それを自慢するほど無邪気でも馬鹿でもなかった。トーマスは、女の子がどんな話題に興味を示すか見当もつかなかったので、この春は仔馬が二十頭も産まれたのだ、グレイ家の綿花畑は去年よりも広くなったのだ、当たり障りの無さすぎることをぼつりぼつりと口にするだけだった。これではいけないと話題を転換して。

「優秀な素質を受け継がせるために、家畜を親子で交配させることだって珍しくはない」

なんとかそれらしい方面へ話題を振ろうとして、唐突に言ってみたりする。

しかし、相思相愛のふたりに語らいは不要だった。わずかなきっかけさえあれば。

「あ……デザートにアップルパイを用意してあるのよ」

バスケットに伸ばしたエレオノーラの手を押さえるトーマス。

「いや、ぼぼぼ、僕は……チェリーがいいな」

「チェリー？ 季節外れよ」

「だって、目の前にあるよ。ほら……」

エレオノーラを引き寄せて、その唇に唇を重ねるトーマス。

「むう……」

エレオノーラは唇を奪われて、恋する青年の胸にしなだれかかった。

「愛してるよ、エレン……」

トーマスの手が乗馬服の胸元に差し入れられて、柔らかな膨らみをそっと包む。

「そろそろ戻らないと、奥様が心配なさいますよ」

メグが絶妙のタイミングで水を差した。

エレオノーラは我に還って、顔を紅く染めた。羞恥ではない。キスだろうと愛撫だろうと、いや排泄行為だろうと、家畜に見られて

恥ずかしいわけではない。

「奴隷のくせに、いちいち主人に指図をするつもりなの？」

家畜が人間らしい分別をはたらかせて主人の行動を妨げようとした、その思い上がりにエレオノーラは怒り狂っていた。

「もう許せない。おまえの立場を思い知らせてやる。家畜のくせに服なんか着てるんじゃない。素っ裸になって、そこに立ちなさい」

「エレン、奴隷の言葉なんか無視しておけよ」

「いいえ、奴隷をきちんと躡けるのは飼主の義務よ」

メグは悲しそうな目で腹違いの妹を見上げて。立ち上がると衣服を脱ぎ始めた。農作業で鍛えられた逞しい腕が、挑発的に乳首を突き出した豊満な胸が、子供のころに激しく鞭打たれた傷跡をうっすらと留めている背中が、肉感的だが引き締まった太腿が、そして女性にとってもっとも恥ずかしい箇所までが白日の下に晒された。

そこには秘裂を隠すべき翳りがなかった。かわりに――横長のハートの枠に囲まれた S L A V E の文字が、薄ピンク色に浮かび上

がっていた。それはエレオノーラの父親が、手を付けた牝奴隷に施す焼印だった。

「へえ……話には聞いていたが、見るのは初めてだ」

トーマスが興味津々にメグの股間に顔を近づけた。奴隷に焼印を捺す所有者も皆無ではないが、これほど凝ったデザインは珍しい。

彼のズボンがテントを張っているのは、若い女の裸身を見たせいだけではないだろう。グレイ家の当主は牝奴隷を抱く前にその毛を剃ってしまうという噂が事実だったこと、股間の滑らかさを見ると過去数日のうちに抱かれているに違いないという推測。そして何より。父親が実の娘を犯すという、人間同士なら父娘とも縛り首にされかねない背徳の構図。そのすべてが、若いトーマスを興奮させていた。

今日のキスが初めての経験だった初心なエレオノーラでも、恋人と思い定めている男が自分よりも奴隷娘に興味をひかれていることくらい察知できる。もちろん、人間が家畜に嫉妬するなんてことはないのだけれど。この奴隷娘は、自分の母親を孕ませた人間に抱か

れて平然としている恥知らずだった。そんな女は、こっぴどく懲らしめてやらねばならないのだけれど。たとえ自分の奴隷であっても、殿方を差し置いて女主人然と振る舞うのものはしたくない——エレオノーラは、そんなふうに関自分の心を偽った。

「わたしの力では、この奴隷を存分に懲らしめられないわ。トミィ、あなたの逞しい手でこいつの乳房を叩いてくださらない？」

「ふうん……」

トーマスは奴隷娘の正面に立って、その重みを計るように左手で乳房を持ち上げた。ぎゅっと乳房をつかまれても、メグは身じろぎひとつせず、宙を見つめて立ち尽くしている。

「姫君の思し召しのままに」

芝居がかったお辞儀をしてから。

「両手を頭の後ろで組め。姿勢を崩したら罰を追加するぞ」

冷酷というよりは、牛を追い立てるときのように感情を欠いた声で奴隷娘に命令した。

メグは言われたとおりの姿勢を取った。叩かれてもよろけないようにと、両脚を開いて踏ん張った。

「なかなか、躰が行き届いているね」

羞恥心に乏しい家畜でも、若い牝が自発的に脚を開くには、それなりの覚悟がいる。そのことを、トーマスは評価したのだった。

トーマスは右手を大きく振りかぶって、スナップを利かせたビンタを奴隷娘の乳房に叩きつけた。

バシン！

メグの乳房がぐにゅっとひしゃげて、ぶるると弾んだ。

バシン！

反対側の乳房に手の甲が叩きつけられる。

「く……」

喰いしばったメグの歯のすきまから、かすかに息が漏れた。

バシン！　バシン！

命じられたとおりに姿勢を崩すまいとしてメグは苦痛を耐えているのだが、それがエレオノーラには不遜な態度に思えた。

「トミィ、鞭を使いなさいよ」

ふたりの恋路を邪魔した奴隷娘を痛めつけることに、トーマスも異存はない。エレオノーラの差し出した乗馬鞭を受け取って、ヒュ

ツと素振りをくれた。

さすがにメグは顔を引き攣らせたが、妹の性格を知悉しているので慈悲を乞ったりはしなかった。

パシイイン！

乗馬鞭が乳房の先端を右から左に薙ぎ払った。

「ひいっ……」

乳首を切り裂かれるような鋭い痛みに、メグは悲鳴をあげた。頭の後ろで組んでいた手をほどいて、乳房をおさえた。

「姿勢を崩すな」

(トミィは楽しんでいるみたい)

エレオノーラは、青年のわずかな声の変化に気づいた。が、たいていの男が内心に秘めている屈折した欲望についての知識が皆無の少女には、トーマスの心を理解できなかった。

メグが乳房から手をはなして頭の後ろで組む瞬間を狙って。

パシイイン！

鞭が乳房の根元に喰い込み、柔肌をぐいっ
とえぐりながら走り抜ける。

「ひいい……」

メグの悲鳴が尾を引いた。が、腕は頭の後ろに保たれていた。

パシイイン！　パシイイン！

鞭の先端がX字を描いて、メグから細い悲鳴を引き出した。

「これくらいで勘弁してやろうよ」

予想外に軽い罰にエレオノーラは不満だったが、残酷な女とは思われたくないので頷いた。

「最後に、姿勢を崩した罰だね」

トーマスは豊満な乳房をひとつずつ両手に握った。掌に包みこめず、親指と人差し指の作る大きな半円から乳暈が顔を覗かせている。トーマスは、乳房の根元に深々と指を喰い込ませた。

「ああっ……」

メグが口を半開きにして苦悶の声を吐き出した。

「あ、ああ……お、お赦しを……」

ぎりぎりとして乳房をひねられて、ついにメグは慈悲を願った。

「それじゃ、こっちは許してやる」

トーマスは左の乳房を解放してやった。そ

して、空いた手で右の乳首を力いっぱいには抓った。

「きひいいっ……」

これまでになく切迫した声で、メグが痛みを訴えた。

「女の身体は先端が急所なんだよ」

後輩に教えを垂れる調教師といったところだった。

「もっと厳しく罰する場合には……」

トーマスは語尾を濁した。股間にひそむ突起を虐めるのだと言ってしまうと、同じ肉体的構造を持つ少女がどう反応するか、不安になったのだ。

「お父さんか奴隷監督に聞いてみろよ」

トーマスは、この奴隷娘にそこまでの責めを加える情景を頭に描き、ズボンがきつくなるのを感じて前かがみになった。しかし、奴隷娘の姿にエレオノーラを重ねることまではしなかった。まともな人間なら、牝奴隷と淑女とを同一視するはずがなかった。

なんとなく中途半端に、メグへの折檻が終わってしまった。異母姉に着衣を許さず、素裸ですべての荷物を持ち帰るよう命じること

で、エレオノーラはどうか鬱憤をおさめた。

トーマスは恋人（にかなり近づいた少女）を屋敷まで送り届けると、颯爽と駆け去った。トーマスの女中が息を切らせながら、その後を追う。

エレオノーラは自分付きの女中に許しを与えてから、二階の自分の部屋へ行った。下働きのジョンが壁紙の張り替えをしていた。

「あら、まだ終わってなかったの」

「申しわけないです。ご主人様に急用を言いつかりましたので」

エレオノーラよりひとつ若いこの少年は手先が器用なので、グレイ家では重宝していた。

エレオノーラは乗馬服を脱ぎ、ブラウスと下着も脱いだ。少年がいても平気だった。犬や猫に裸を見られて恥ずかしいと思う人間はいない。

横向きの裸身をドレッサーに映して見て、エレオノーラはふっと眉を曇らせた。

（男の人って、胸が大きい女の子を好むのかしら？）

メグの乳房を弄んだとき、トーマスは平静

を装っていたけれど、目が輝いていた。

（あと五年のうちには、あたしのおっばいだってあいつに負けなくらい豊かになるんだから）

と、信じたいのだけれど。エレオノーラの母親はほっそりしていて、子供は彼女ひとり。メグの母親はいかにもグラマラスで、子供は五人。血統の段階で勝負がついていた。

ふっと気づくと、ドレッサーの近くで壁紙を張っているジョンの様子がおかしかった。動作が緩慢で、腰を引いた不自然な姿勢だった。

（まあ、なんてこと？）

牡の家畜が人間の女性の裸身を見て興奮するなんて、許されていいことではない。叱ろうとして、エレオノーラは悪戯心を起こした。トーマスも同じような反応を示していたのを思い出したし、メグへの憤りもくすぶっていた。

「下穿きも汗で濡れているわね」

ジョンに聞こえるように言ってから、エレオノーラは全裸になった。その姿で、腰に手を当てて少年に正対した。

「おまえ、なんでそんなへっぴり腰をしてるの。まさか、あたしの裸を見て邪まな心を起こしたんじゃないでしょうね？」

「けっして、そんなことは……」

「それならズボンを脱いで、おまえのペニスがどんなふうになっているか、見せなさい」

「そんなふしだらなことはできませんです」

「なにが、ふしだらよ。人間のあたしが裸になっているのよ。家畜のおまえが服を着ているなんて、変だわ」

強く言われて、ジョンはうつむいた。お嬢様の勝ち気で高慢な性格は、少年も知っている。少年は視界から娘の眩しい裸身を締め出して、ゆっくりとズボンを下げていった。そんな努力にもかかわらず、短い下穿きを突き抜けて少年の腹に密着したペニスが、少女の目に晒された。

「まあ！　ほんとうに、ふしだらね」

鏡台に置いていた乗馬鞭を手にして、エレオノーラはペニスの先端をつついた。ぴくっと、少年の腰が震えた。

「うあ……おゆるしてください、お嬢様」

「下穿きも脱ぐのよ」

少年は整った顔立ちを哀しそうにゆがめて、若い女主人の命令に従った。圧迫から解放されたペニスは、ますますいきり勃つ。

（元気はいいけど……まだ子供だから、こんなものよね）

牧場の子供が幼い時分から牛馬の種付を見て育つように――エレオノーラも、奴隷同士の交尾を幾度も目撃している。そんな彼女の目から見ると、六インチ（十五センチ）そこそこの少年のペニスは可愛いとさえ思えるサイズだった。

「これが邪まな心の証しじゃないのなら、なんだっていの？」

前を隠そうとする少年の手を乗馬鞭でピシヤリと払いのけて、亀頭部をチップ（先端の平たい部分）で軽く叩いた。とたんに……びくびくっと少年の腰が痙攣した。

「ああっ……！」

おびただしい量の白濁が真上に噴出した。

「うわっ……汚い！」

あわててエレオノーラは跳びのいた。さいわい彼女にはかからなかったが、床が汚れてしまった。

「この馬鹿。さっさと拭き取りなさい」

少年はあたりを見まわしたが、モップも雑巾もなかった。

「おまえの下着で拭けばいいでしょ。ああ、駄目よ。そのままかがんだら、上着から垂れるじゃない。素っ裸になりなさい」

それが、エレオノーラに思いつくかぎりの少年への辱めだった。床に這いつくばらせて舌で汚れを舐め取らせるという発想まではなかった。

エレオノーラは手早く普段着に着替えると、床の清掃を終えて手持無沙汰に立ち尽くしている全裸の少年を屋敷の外へ追い立てようとした。

階段の下に、母親のジェニファーが立っていた。

「まあ……裸で。何があったの？」

「おお、奥様……！」

ジョンが階段を駆け下りてジェニファーの足元にひざまずいた。

「おいら、もう二度とお嬢様にふしだらなこと、考えねえです。だから、どうかおゆるしてくださいです」

「そうよ。こいつ、あたしの着替えを盗み見して、淫らなことを考えたのよ」

エレオノーラが勝ち誇ったように言った。

「だから、パパに言いつけて、うんと厳しく罰してもらおうの」

「勘弁してやりなさい、エレオノーラ」

ジェニファーが娘をたしなめた。

「男の子が女性の肌を見れば、勝手に肉体が反応してしまいます。それくらいは見逃してやりなさい」

「家畜が人間の裸を見て興奮するなんて、間違っているわ」

フルスペルで名前をよばれたくらいでびくつく少女ではなかった。

「間違った行為はその場で罰しなければ、動物の躰はできないわ」

「その子は肌が黒いけれど、それでも人間です」

「人間というのは、白人の同義語よ」

それは父親の受け売りだった。

「かりに、こいつが人間だとしても……肌の色がついてるのは、神に呪われた証だわ。白人よりも頭が悪くて薄のろで食欲で卑劣で、

生まれながらの犯罪者よ。あたしたちが奴隷として働かせてやらなければ、野垂れ死にするような劣等人種なのよ」

まくし立てると、エレオノーラは少年の腕を引っ張って外へ連れ出した。

「パパ！　パパはいないの？」

「親父ならサロンへ行ってるよ」

騒ぎを聞きつけて、兄のウィリアムが姿を現わした。ここひと月ほど、父のチャールスは午後の数時間を町のサロンで過ごすのが日課になっていた。つぎの町長選挙に打って出て、富のつぎは名誉を狙っている。

「いったい、なんの騒ぎだ。ジョンに襲われでもしたのかい？」

「まさか」

エレオノーラは手短かに事情を説明した。

「ジョッシュを呼んできてちょうだい。彼に鞭打たせるわ」

ジョッシュが鞭打ちの名手というわけではない。むしろ逆だった。適度の強さで打つのが苦手で、だから相手に過度のダメージを与えてしまう。

「それは、この華奢な子供には可哀そうだ。

俺が懲らしめるから、それで赦してやれよ」

「それで、いいわ」

エレオノーラが兄の言葉に異を唱えるはずもなかった。先妻の忘れ形見であるウィリアムは、エレオノーラが世界で二番目に愛している人だった。もちろん一番目はパパで、三番目はママかトミィのどちらかだ。

ウィリアムは近くにいた老僕に、懲罰用の巻き鞭を持ってくるよう命じた。馬をつなぐ柵のところへ少年を追い立て、両腕を広げた形で後ろ向きに縛りつけた。

老僕が、悲しそうな顔で巻き鞭をウィリアムに差し出した。長さが十フィート（三メートル）もあるしなやかな鞭で、外見は牛追いに使う鞭とそっくりだ。牛追い鞭は動物を威嚇する目的で派手な音が鳴るように工夫されているが、細いピアノ線を鞣革で編み上げた懲罰用の巻き鞭は音よりも痛みが大きい。

ウィリアムが巻き鞭をかまえたときには、二十人ちかい女中や老僕がふたりを取り巻いていた。彼らの見守る中で、ウィリアムは巻き鞭を振るった。

ヒュンツ……パシイン！

「ぐっ……」

少年が呻き声を漏らした。尻にはくっきりと鞭痕がついたが、肌が裂けるほどではなかった。

パシイン！　パシイン！

スナップを利かせて十分な痛みを与えているが、当たる瞬間に腕を引くので鞭が絡みついて不必要に肌を傷つけることはなかった。ジョンは仕事を怠けたり盗みをはたいたり、暴力で主人に反抗したわけではない。これくらいの懲罰が妥当なところだった。

ウィリアムは尻に十発の鞭をくれたあとで、背中を強く二回打った。それは、悲しそうな目で眺めている継母への反発だったのかもしれない。

少年の縄がほどかれると、人垣の中から母親と姉が飛び出してきた。

「息子が粗相しまして、申しわけございませんです。わっしからも、よく言い聞かせますんで」

「軽い罰で赦していただき、ほんにありがとうございます」

ジョンを両側から支えて一家の小屋へ連れ

帰った。

「おまえも慎みなさい」

屋敷へ戻ってから、ウィリアムは妹を軽く叱った。

「家畜といっても、人間と交配できるのだから。わざと挑発するんじゃない」

性器への刺激がなければ思春期の少年といえどもそうそう射精するものではないのだから——気まぐれなお嬢様が奴隷をからかったのだらうとは、すぐに想像がつく。

まるで現場を目撃していたかのような兄の口ぶりに、エレオノーラはしゅんとなった。

「ごめんなさい。これからは気をつけます」

それでも、スカートの裾をつまんでわざとらしく淑女の礼をしてから自分の部屋へ引きあげたあたり、堂に入った勝ち気っぷりだった。

2. あばかれた血筋

土曜は農園の見回りを午前十時には終えて、町まで買いに行かせた週刊新聞を昼まで読むのが、チャールス・グレイの習慣だった。しかし、この日は違っていた。

新聞を手にとった瞬間、彼は苦い顔になった。しかし記事を読み進むうちに、その顔は真っ赤に染まっていった。

「ウィル、町へ行くぞ。デュースの組を呼べ。おまえもついて来い」

新聞を握りしめて二階へ駆け上がったチャールスは、ガンベルトを締めて戻ってきた。

「ダーリン、ランチはどうするの？」

妻のジェニファーが、のんびりと訊ねた。夫が熱くなればなるほど、ふだんよりおっとり構えるのが彼女なりの亭主操縦術だったが、今日ばかりは通用しなかった。

「いらん」

ぶっきらぼうに答えて、チャールスは出て行った。

「七人か。喧嘩と決まったわけでもないから、四人でいい。ショットガンを忘れるな」

矛盾した命令を怒鳴りながら、チャールスはもう馬を走らせている。ウィリアムがあわてて後を追い、デューズと二人の部下は武器を取りに戻った。

「対立候補と決闘でもする気かしら？」

ジェニファーは不安を紛らそうとして、笑えない冗談を言った。小さな鉛玉を広範囲にばら撒くショットガンは、近距離での殺傷能力が拳銃とは桁違いだ。喧嘩や決闘どころか、大量殺人になりかねない。チャールスが新聞を持って行ってしまったので、なにが夫をそこまで激怒させたのか、彼女には見当もつかなかった。

午後一時まで待つてから、ジェニファーとエレオノーラの母娘は軽い食事をとった。

チャールスが帰ってきたのは、午後三時過ぎだった。馬は七頭。牧師と保安官がついて来ていた。

屋敷を飛び出したときの激情は、チャールスの顔から引いていた。かわりに、デスマスクのような無表情を貼りつけている。

ばさっと新聞（しわくちゃになっていないから、新しく買いなおしたのだろう）をジェ

ニファアの足元へ投げつけた。

「否定できるか？」

ジェニファアが新聞を拾いあげた。

『新町長夫人は黒人？』

大きな文字が躍っていた。

「否定はできまい。養子縁組の書類も、本来の出生証明書も、連中は押さえていた。押さえていたところか、でかでかと掲示板に貼り出しておった」

「おお……」

ジェニファアは床に膝をついて、両手で顔をおおった。

「よくも今まで、俺を騙していたな。結婚は無効だ。今日から、おまえもエレンもグレイ家の奴隷だ。この宣言は有効ですな？」

チャールスが、牧師と保安官を振り返った。

「神の定め給えた道徳に反する婚姻は無効です。アーメン」

「俺が証人だ。所有者のいない有色人種は、捕獲した者の奴隷として登録される」

十七年間にわたって育まれてきた結婚生活は、一瞬で崩壊した。

「騙すつもりはなかったのです」

ジェニファーが弱々しく訴えた。

「曾祖母が黒人だったなんて、わたし自身も忘れていました。七つの歳に養父母に引き取られてからは、ずっと白人として育てられてきました」

「そんなことは関係ない。おまえの身体には劣等人種の血が少なくとも八分の一は雑じっている」

ジェニファーは（奴隷が主人に対してするように）ひざまずいたまま両手を胸の高さで組んで夫を見上げた。

「わたしは奴隷に墮とされてもかまいません。でも、娘は……あなたの愛娘だけは、これまでどおりに扱ってやってください」

「三十二分の一の混血までは黒人だと、法律でも定められている。儂は、たとえ百二十八分の一でも白人とは認めんがな」

「おお。お願いです。チャーリー」

チャールスは、不意にジェニファーの腹を蹴った。

身体を折って呻くジェニファー。

「馴れなれしく主人の名前を呼ぶな」

チャールスが、母の背後で凍りついている

エレンに顔を向けた。

「わかったな、エレン。おまえの白い下腹部にも、メグと同じ焼印を捺してやる」

エレンは父親の恐ろしい宣告の意味を理解できなかった。世界で一番愛している人から受けた、自分が白人ではなかったという告発。その衝撃に呆然としていた。

(嘘だ嘘だ……これは夢だわ)

エレンは唇を思い切り噛みしめた。痛かった。

(現実……違う！　でも、ママは自分がそうだと認めた？)

「そんな……恐ろしいことを！」

悲鳴をあげたのはジェニィだった。

「どうしても娘を奴隷に墮とすとおっしゃるのでしたら、せめて……せめて、ふつうに扱ってやってください」

「儂はメグを特別扱いにした覚えはないぞ」

チャールスも、最初は今の母娘と同じくらいの衝撃を受けたはずだ。しかし、町へ行って真偽を確かめているうちに冷静さを取り戻していた。処女を、それもできるだけ若い娘を犯すことに昏い悦びを覚えるこの男は、見

かけは白人そっくりの少女を抱ける機会を得たことに気づいたのだった。彼にとって、それは町長選挙を失った代償にはならなかったが、わずかに傷心を癒すよすがにはなった。ジェニイについては……自分の方針に逆らって奴隷を甘やかす妻を苦々しく思っていた。長年連れ添った夫婦の間にかよう穏やかな愛情は、彼女が妻たりえない動物だと確信した瞬間に消し飛んでいた。

「あたしが白人じゃないなんて……なにかの間違いだわ」

失神の寸前で立ち直って、エレンは断言した。

「そうよ。きっと、パパの対立候補の陰謀よ。書類なんて、偽造したんだわ」

「おまえは奴隷として定められた人種だといきなり言われても、すぐには信じられないし受け容れられないだろうな」

「信じるもなにも、嘘に決まってるじゃない」

チャールスは、数時間前までは自分の娘だった少女の言い分を聞き流して、自分の言葉をつづけた。

「だから、その身体に教えこんでやらねばな

るまい。おい……」

チャールスが合図すると、デュースの部下が二人ずつ、母娘を前後から囲んだ。

「ちょ……なにをするのよ!？」

羽交い絞めにされてもがくエレン。前に立った男が胸元に手を差し込んで、一気に服を引きちぎった。

「いやあああ……！」

「わめくな」

男はバシンと容赦のないビンタを張って、エレンがひるんだすきに下着まで引き裂いた。

ジェニィは最初から抵抗をあきらめている。

チャールスは、下穿き一枚にされたふたりを屋敷の外へ引きずり出した。すでに五つほどの黒い顔が、奴隷小屋と屋敷を隔てる垣根の向こうから様子をうかがっていた。

その垣根のそばに立っている大きな樹の下へ、ジェニィだけ引き立てられた。

「いやっ……縛らないで。暴れたりはしません」

抗議もむなしく、ジェニィは手首を重ねて縛られて、樹の枝から吊るされた。足が地面に着いているのはせめてもの慈悲——ではな

いことを、じきにジェニィは身をもって知ることになる。

土曜日なので早仕舞いを許された奴隷も多い。あっという間に見物人の数は二十を超えた。何事かと主人に訊ねるような身の程知らずはひとりもない。ひそひそとささやき交わす声が、垣根の向こうでつづいている。奥様の裸身を見るなど恐れ多いとばかりに、目を伏せている者が多かった。

「そいつの調教は、俺にやらせてくれよ」

息子のウィリアムが申し出た。すでに巻き鞭を手に行っている。

「そういえば前から、物欲しそうな顔でこいつを眺めておったな。好きにしろ」

ウィリアムは喜色を浮かべてジェニィに近づいた。下穿きの縁に指をかけて。

「フリルがひらひらの、絹のドロワースか。牝奴隷が身に着けるものじゃないな」

足元まで引き下げた。髪の色と同じ褐色がかかった金色の恥毛が、傾いた陽射しを受けて燦然と輝く。

「なんてことするのよ、ウィル！」

抗議の声をあげたのはエレンだった。

「ママの下着を元に戻して。今すぐよ！」

母親に駆け寄ろうとして、エレンは腕をつかまれた。

「はなしなさいよ、デューズ」

どうしようと、目顔で雇い主に訊ねる
奴隷監督。

「馬つなぎに縛っておけ」

エレンは馬をつなぐ柵のところまで、ふたりがかりで引きずられていった。ひざまずいて横木を背中にかつぐ形にされて、広げた腕を縛りつけられた。

「やめてよ。ほどきなさい。こんなことをしてただですむと思っているの！」

「ただですまないのは、おまえのほうだ」

チャールスが、こちらは恐ろしいほどの無表情でエレンの前に立った。

「うむ。おまえも牝奴隷にふさわしくない下着だな」

心中の憤怒そのままに、一気に下穿きを引きちぎった。

「お願い、パパ。もうやめて。何かが間違ってるのよ」

目に涙をにじませて訴える少女を、チャー

ルスは冷たく見下ろした。引き裂いたばかりの下穿きを小さく丸めて。

「口を開けろ」

エレンの目が大きく見開かれた。父の意図は明白だった。けれど、娘を素裸にして、その身に着けていた下着を口に詰めるなんて、そんなことをするなんて信じられない。

チャールスは無言で片手をエレンの下腹部に伸ばした。金色の淡い叢におおわれた、ふっくらした秘裂。その間からひっそりと覗く可憐な花卉を、太い指がうがった。

「痛い……！ やめて。抜いてちょうだい」

勝ち気な口調は消えていた。

「口を開けろ」

チャールスは繰り返して、指をさらにこじ入れてグリッとねじった。

「いやああ……むぶう」

思わず叫んだ口にエレンは自分の下穿きを詰め込まれて、目を白黒させた。

「うええ……」

喉が刺激されて、吐き気がこみあげてくる。舌を動かして詰め物を押し出そうとすると、さらに奥まで押し込まれた。

「ひいいっ！」

母の鞭打たれる悲鳴がエレンの耳にとどいた。チャールスが脇に寄って、調教の光景を娘に見せつける。

樹の枝から吊るされたジェニイの尻と背中には、水平に何条もの鞭痕が走っていた。白い肌に真っ赤な線条が、残酷なまでに鮮やかだった。

「詰め物を吐き出したら、厳しい罰を与えるぞ」

耳元にささやかかれて、怯えきったエレンは、無意識のうちにこくんとうなずいていた。

「おお……もう許して、ウィル。いえ、若旦那様、どうかお許してください」

ジェニイが奴隷言葉で赦しを乞った。ウィリアムは鞭打つ手を休めて、一時間ほど前までは継母だった女の言葉を聞いている。数秒の沈黙が、ジェニイから言葉を引き出す。

「わたしが奴隷であることは、じゅうぶんにわかりました。どんなご命令にも従います。ですから、どうか……もう、お赦してください」

卑屈な態度は、彼女の弱さからきたものではない。娘を救えるのであれば、鞭で打ち殺

されようと縛り首で吊るされようと、喜んで運命を受け入れていただろう。ただプライドを守るだけのために、最後まで鞭打ちに耐える道もあった。

しかし、ジェニイは夫と義理の息子の性格を知り過ぎていた。彼らは、町の住民の平均年収の何倍にも相当する貴重な財産（奴隷）を、一時の激情だけで台無しにしたりはしない。鞭打ちに屈服しなければ、さらに過酷な調教が彼女を待っている。娘への調教も、いきおい厳しくなるだろう。夫が納得する程度まで鞭打たれてから、彼の虚栄心を満足させるに足る卑屈な態度で服従を誓う。それがジェニイの計算だった。

ジェニイの誤算は、ウィリアムの年増女への執着と、父子の性的残虐さとを過小評価していたことだった。

「ほんとうに、どんな命令にも従うんだな？」

はっと、ジェニイは義理の息子の顔を見た。が、すぐに目を伏せた。言葉の裏にどんな意図が隠されていようと、彼女にできる返事はひとつしかない。

「……はい。どんなご命令にも従います」

ウィリアムは唇の端をゆがめて薄く嗤った。
「では、最初の命令だ。あと二十の鞭をくれてやる。声に出して数えろ」

間違えたら最初からやり直すと、ウィリアムはつけ加えた。

「はい……」

ジェニイは弱々しく答えた。大の男が手加減無しで振るう巻き鞭を二十発も身体に受けたら、急所でなくても生命にかかわる。そこまではしないだろうと、ウィリアムの理性と慈悲を信じるしかなかった。

「こっちを向け」

ジェニイはそっと唇を噛んで、まだ無傷の側を正面に向けた。

ヒュンッ……鞭がしなりながら空間を扇状に切り裂いて。

ビシイイイ！

けっして豊満とはいえないが品よく盛り上がった膨らみに鞭が喰い入って、柔肌をこすり抜けた。

「ひいいっ！……ひとつ」

悲鳴の奥から数を押し出すジェニイ。

バックハンドの鞭が右の乳房をひしゃげさ

せる。

「あああっ！……ふたつ」

ウィリアムはジョンを鞭打ったときとは違って、打撃の寸前で腕を翻したりはしなかった。鞭は存分に肌を噛んでいた。太い線条が左右の乳房に一本ずつ刻まれた。

さら乳房を二回打ち据えてから、鞭はジェニイの細い腰に巻きついた。

パシュン……勢いを失った鞭の先端が、臍の下に当たる。それでも乗馬鞭で打たれるくらいの痛みはあった。

「いつつ……くうっ！」

ウィリアムがぐいと鞭を引き戻すと、ジェニイの身体がよじれた。鞭は腰を締めつけながら抜けていき、赤い輪を腰に刻んだ。

「むっつ……ななつ……」

同じところを三度続けて打たれて、真紅のベルトのようになった鞭痕から鮮血がしたたった。

ウィリアムは双つの膨らみに一発ずつくってから、胸から臍にかけてX字を刻んだ。乳房への鞭も含めて、ジェニイは呻くだけで悲鳴はあげなかった。

「動物の血が流れているだけあって、痛みには強いようだな。淑女なら、とっくに気絶しているところだ」

ウィリアムは鞭を逆手に持って、柄を太腿の間にえぐり入れた。

「牝犬なら、こんな刺激でも発情するんじゃないか？」

柄を後ろまで通して、鞭の腹で股間を前後にしごいた。しごきながら、じわっと両手を引き上げていく。

「くうう……」

ジェニィは爪先立ちになったが、鞭はさらに引き上げられていく。編んだ鞣革で秘裂の内側をこすられて、ジェニィの顔が苦痛にゆがむ。

やがて、ずしゅっずしゅっと軽い音が股間から漏れるようになり、だんだん音が湿り気を帯びていく。

ズジュ……ジュリュ……

それは、過度の刺激から肉体を護ろうとする悲しい生理的反応だったが、男はそうは見ない。いや、女を辱めようとして、わざと取り違える。

「虐められて濡らすとは、とんだ淫乱牝だな」
ウィリアムは鞭を引き抜き、柄を垂直に立てて突き上げた。

ズブウッ……と、角張った柄が股間に埋没していく。

「いやあ……抜いて！」

苦痛よりも羞恥に、ジェニィは悶えた。

「それが、奴隷の口の利き方か？」

ウィリアムはさらに奥深くまで柄をくじり入れて、前後左右にこねくった。

「い、痛い……お許してください、若旦那様」

「……ふん」

ウィリアムは、あっさりと責めを中止した。
鞭を握りなおして二歩下がる。

「脚を開け」

ジェニィは恐怖に顔をひきつらせた。しかし、慈悲を乞う愚は冒さなかった。

「ああ、あああ……」

ジェニィはわななく唇から絶望の声をこぼしながら、おずおずと両足を左右に広げていった。

シュウッ……蛇のように地面すれすれを一直線に奔った鞭は、獲物の脚の間でうねるよ

うに跳ね上がった。

ピシイッ……！

スイングを伴わない打撃だが、皮膚が薄く神経の密集した箇所だから痛みは凄まじい。

「きひいいいっ！」

のけぞったジェニィの喉から甲高い悲鳴がほとばしった。背中が反りかえり、手首を重ねて縛られた両手が宙をかきむしった。

ウィリアムは、苦悶のダンスを悠然と見物している。

「何発目だ？」

冷たい声に、ジェニィの顔がひきつった。

「そ、そんな……たしか……」

「最初から数えなおせ。忘れた罰を加算して、あと三十発だ」

それが目的で、ウィリアムは鞭打ちを中断していたのだった。

「あたしは覚えてるわ。今ので十二発、残り八発よ！」

エレンが口の詰め物を吐き出して叫んだ。すっかり唾液を吸い取られて、声がかすれている。

ウィリアムは義妹だった少女を一瞥して、

継母だった女に向きなおった。

「三十発だ」

「三十発なんて、ママが死んじゃう。ウィル、
お願いだから……もう、やめてよ」

勝ち気なエレンがすすり泣いていた。

「ちょっと待て、ウィル」

ずっとエレンのそばで様子を見ていたチャールスが、息子を止めた。

「おまえが三十発を引き受けるというのなら、
母親は八発だけで許してやるぞ」

合計で三十八発。どんどん増えていると、
エレンは気づいた。

「どうしてよ、パパ？ 昨日まで、ううん今朝まで、あたしたちは仲の良い家族だったじゃない。どうして、こんなひどいことができるの？」

エレンは大粒の涙をこぼしながら訴えた。

「おまえたちが動物だからだ」

エレンは、頭を叩き割られたような衝撃を受けた。涙さえ止まってしまった。

(あたしが、ほんとうに動物だとしたら……
奴隷だとしたら……)

パパたちの行為は間違っていない。野生の

動物に自分が奴隷だと認めさせるために調教するのは当然の行為どころか、飼主の義務だ。自分が白人だなんて妄想を打ち砕くには、性的な辱めが有効かもしれない。そして、奴隷は主人に服従しなければならない。

エレンがこれまで培ってきた価値観は、かつては家族だった（と、誤って信じていた）男たちに、彼女が服従することを要求していた。

「どうする？ 母親に代わって三十の鞭打ちを受け入れるのか？」

エレンの長い沈黙に焦れて、チャールスが重ねて訊いた。

「……はい」

ゆがんだ価値観にねじ伏せられたエレンの正義感は、抑圧者を糾弾するのではなく、自身に対して拒否の言葉を封じたのだった。

「そういうことだ」

残忍な笑みを浮かべて、チャールスが息子を振り返った。

「十三から再開して二十までだ。それで許してやれ。ただし、この娘が声を出すたびに五発ずつ増やす」

「そ……」

抗議しかけて、エレンは声をのんだ。言ったことは必ず実行すると、少女もこの男の性格は知っていた。

「長年同じベッドに寝かせていると、家畜にも情がうつるのかい？」

憎まれ口を叩いて、ウィリアムは吊るされている女に近寄った。

「それじゃ、俺もちっとばかり手加減してやろう」

巻き鞭の根元を丸めて握りこみ、三フィート（九十センチ）の長さに調節する。

「脚を開いているよ」

右腕を大きく後ろに引いて、前から上へ思い切り振り抜いた。

バシッ……！

「ぎゃああっ……！」

花卉の奥まで鞭の先端でえぐられて、ジェニィは絶叫した。

鞭は短くなってもスイングの速度が加わって、最初の一撃よりはるかに破壊力は大きかった。扱いやすくなったぶん、狙いも正確だった。

「……じゅ、じゅうさん」

突っ張った四肢がガクンと弛緩した。そこへ、つぎの鞭が叩き込まれた。

「うあ……」

びくんびくんとジェニイの全身が痙攣した。悲鳴を吐き出そうにも、息を使い果たしていた。

「……じゅ、じゅうよん」

はあはあと荒い呼吸を繰り返してから、ようやく声を押し出す。

つぎの一発は、さらに厳しかった。

「この調子では、最後までもちそうにないな」

ウィリアムは鞭を巻いて脇にたずさえ、右手の中指と薬指で、六歳年上の女の股間をうがった。継母と義理の息子といっても、年齢差はそれだけしかないのだった。

「ここを懲らしめるのは、おしまいにしてやる」

二本の指を曲げて膣を搔きまわし、親指の腹でクリトリスを転がした。

「ああっ……そこは赦して」

「感謝の言葉を忘れてるぜ」

「あ……はい。ありがとうございます」

「なにに感謝してるのか、はっきり言え」

指を半分ほど引き抜いて、親指と人差し指でクリトリスをつねった。

「ひい……股への……」

「カントだ」

クリトリスに爪が立てられた。

「ぎ……カントへの懲らしめを、おしまいにしていただいて……ありがとうございます」

「これからは、奴隷にふさわしい言葉づかいを忘れるな。股間だの陰部だの、お上品な言葉は使うな」

ウィリアムは十フィート（三メートル）はなれて立ち、巻き鞭をほどいた。

「恨むんなら、自分が産んだ娘を恨むことだな」

その言葉はエレンにも聞こえたが、意味は理解できなかった。

ビューン……

それまで耳にしたこともない風切音とともに、鞭が母の腹部に叩きつけられた。

ズバアッシイイン！

「ぎゃああああっ！」

水を満たした革袋を叩き割るような音と、

野獣の咆哮のような絶叫とが、ほとんど同時にエレンの耳を圧した。

「ひ……！」

声を出すたびに五発の追加。一方的に追加された罰則を思い出したエレンは、歯を喰いしばって悲鳴をこらえた。成人男性が本気で鞭を振るえばどうなるか。それを目の当たりにして、エレンはおののくしかなかった。

「……じゅうろく」

エレンは、母の強靭さにも圧倒された。もしも自分が、あんなふうに鞭打たれたら——泣きわめくか失神するか。いずれにしても、最初から数えなおす口実を処刑執行人に与えているだろう。でも、なぜ？ なぜ、こんなにも過酷に鞭打つのだろうか。中断するまでは、打ち方がもっと軽かったように思う。

(もしかしたら……)

エレンは、娘を恨めという言葉を出した。三十発分の苦痛を八発にまとめて与えるつもりなのだ。この処刑執行人——あるいは、若旦那様は。

エレンの意識の中で、異母兄への思慕は急速に、支配者への恐怖に変容しつつあった。

ズバアッシイイン！

「じ、じゅうなな」

母の背中が深々と切り裂かれ、鮮血が白い肌を紅く染めていく。

ふうっと、エレンの意識が途切れた。

……足の甲が地面をこする痛みで、エレンは意識を取り戻した。二人ががりて引きずられていた。エレンは大樹の下に引き据えられた。母は、まだ枝から吊るされたままだった。がくんと頭を垂れ、膝が折れて体重が腕にかかっている。

「つぎは、おまえの番だ」

見慣れているのに見知らぬ白人の男性が、エレンに告げた。

エレンは、手首を重ねて男の前に突き出した。それは屈辱的な動作だったが、奴隷ならそうすべきなのだ。

「ほう……おまえは、自分の立場をわきまえているようだな」

見知らぬ中年の男性はエレンの手首を縛ると、母から五フィートはなれた枝にロープを投げた。

エレンはロープの端を目で追って。生垣の

むこうに鈴なりになっている奴隷たちの表情に気づいた。母が鞭打たれていたときの、奴隷たちの悲痛な眼差し。敬愛する奥様への同情と、チャールス父子への無言の非難。それらが消え失せていた。

腕を吊り上げられながらエレンは、心の奥から湧き上がってくるさまざまな不安を、恐怖を、黙殺しようと努めた。

「メグ、ジョン」

チャールスは、屋敷の壁に張りつくようにして成り行きを見守っているふたりを呼びつけた。

「二日前、おまえたちはこの娘に鞭打たれたんだったな。仕返しのチャンスを与えてやる。十発ずつ、こいつを叩け」

ふたりは目を丸くしてエレンの裸身を眺め、それから互いに顔を見合わせた。ふたり（だけでなく、ほとんどの奴隷たち）にとって、白人にしか見えないジェニィとエレンは、まだ主人の側にいる人間だった。人間様の身体に危害を加えるなんて、恐れ多い。しかし、グレイ家の当主、奴隷の所有者が、それを命じている。ジレンマだった。

「わかりましたです。喜んでやらせていただきます」

先に返事をしたのは、意外にもメグだった。「おまえたちに巻き鞭は扱えまい。これを使え」

チャールスが乗馬鞭を手渡した。それはエレンがふだん使っていたものより長く、それだけ打撃力が大きい。

「おっばいに十発だ。右と左、代わりばんこに叩け」

チャールスは、エレンの背後から両方の乳房を揉んだ。

「あ……」

ぴくんとエレンの身体が震えた。男性に乳房をさわられたのは、これが二回目だった。こんなふうに揉まれるのは初めてだった。

「まだ熟れる前といったところか」

上下左右と指の位置を変えながら、品定めでもするように丹念に揉みたてた。そして。

「い、痛い……」

戸惑いと恥じらいに染まっていた頬から血の気が引いた。チャールスの手は乳房を揉むのではなく、握りつぶしにかかっていた。リ

ンゴを三分の一だけ切り取って伏せたような少女の乳房が、レモンのように絞り出される。

「鞭打たれて腫れたら、この貧弱なおっぱいも姉と同じくらいになるかもしれんぞ」

これまではメグとエレンの姉妹関係を絶対に認めようとしなかった男が、わざわざそれを口にする。

「うれしいだろう？」

「……………」

奴隷なら主人に迎合してお礼まで言うべきだと、頭では理解していた。けれど、エレンのプライドがそれを許さなかった。

「おまえは昔から強情だったな。せいぜい儂を愉しませてくれよ」

チャールスはエレンの身体をはなして、彼女の異母姉に向かって顎をしゃくった。

「ええい！」

黄色い気合を発して、メグが鞭を振るった。ペチン……気の抜けた音だったが、エレンの受けた衝撃は大きかった。とにかく痛い。転んで石に乳房をぶつけたことがあるが、それよりもずっと痛かった。と同時に。奴隷としてこき使っていた異母姉に鞭打たれるという

屈辱。

「なんだ、その打ち方は。本気でやらんと、おまえもそこに吊るすぞ」

チャールスが罵声を浴びせた。

メグはすまなさそうな目をエレンに向けて。大きく腕を振りかぶった。

「ええい！」

ヒュン……バシン！

「ぐ……」

乳房から脳天まで激痛が走り抜けた。息が詰まって、悲鳴もあげられない。打たれたところを焼かれているような錯覚が、あとに残った。

「右のおっぱいだ」

バックハンドの鞭が乳房をひしゃげさせた。

「かはっ……」

エレンはのけぞって喘いだ。

左、右と続けざまに打たれて、エレンはよろめいた。ロープに引き戻されて、肩がグキッと鳴った。

(もう、駄目。とても耐えられない……)

ヒュン……バシン！

「うああああっ……！」

吐き出した息が大きな悲鳴になった。それをエレンは恥じた。

(ママは巻き鞭で叩かれても、こんな大げさな声は出さなかった)

母親の我慢強さに感心すると同時に。メグの悲しそうな表情の意味を悟った。もしもメグではなく力の強い男性に、乗馬鞭ではなく巻き鞭で打ち据えられていたら、こんなものではすまない。メグは妹である自分をかばうために、鞭打ちを引き受けたのではないかしら。だから、最初の一発は手加減していたんだ。ううん、今だってほんとうに本気ではないのかもしれない。

ヒュン……バシン！

「ぐっ……」

エレンは悲鳴を嘔み殺した。それが、メグの配慮に報いる唯一の方法だと思った。

最初の一発は数えてもらえず、全部で十一発の鞭を乳房に受けた。リンゴのように真っ赤に腫れあがり、虫に喰われたようにどす黒い打痕をちりばめた乳房は、チャールスが期待した(?)ように大きくなってはいなかった。乳房全体が燃えるように熱く、心臓が脈

打つたびにずきずきと痛んだ。

メグから乗馬鞭を引き継いだジョンは、尻を叩くように命じられた。

「背中も叩かせてください。僕だって叩かれたんだから」

「駄目だ。手元が狂うと背骨を傷つける」

にべもなく拒絶されて、ジョンは頬を膨らませた。彼には、手加減するつもりは微塵もないようだった。

背中を叩く危険性は、エレンも知っている。だから非力な彼女でも、背中は水平か斜めに鞭打つようにしていた。それでも相手を半身不随にしたり殺してしまう恐れが皆無というわけではない。そのときはそのときと軽く考えていたけれど——自分が鞭打たれる側に立たされてみて、ぞっとした。

ざらっと尻を撫でられて、エレンは思いから引き戻された。ジョンだった。片手で尻を撫でながら、乗馬鞭を大胆にも尻の間に差し込んできた。その奇妙な感触に、エレンは鳥肌が立った。

「やめてよ。お尻を叩くように命令されたんでしょ。さっさと叩きなさいよ」

「ほう。この娘は撫でられるより叩かれるほうを好むのか。ジョン、願いをかなえてやれ」

チャールスは、ジョンの淫らがましい行為を咎めなかった。

ざっと、ジョンが後ろに下がる気配。ぴたぴたと、乗馬鞭の先端が尻に当てられた。

ヒュン……バッチイイン！

「うあっ……！」

お尻なら強く叩かれても耐えられる。折檻でぶたれた記憶が、エレンにそう思い込ませていた。けれど、スカートの上から平手で叩かれるのと、素肌を鞭で叩かれるのとでは、痛さが比べものにならなかった。まったく別の懲罰だった。

ヒュン……バッチイイン！

「ぐ……」

それでも、息が詰まるほどではないし悲鳴も出ない。それに乳房と違って、叩かれているうちに感覚が麻痺してきて、最後の何発かは痛みも薄れた。

「今ので十発だ。おまえの役目は終わった」

声をかけられて、ジョンは残念そうにエレンからはなれた。

「仕上げの十発は、儂が直々に打ってやろう」

チャールスがエレンの前に立った。すぐには巻き鞭を手にせず、おのれの血が半分は流れている少女をしげしげと眺めて。ついつと乳房に手を伸ばした。掌に包んで、弾力を愉しむように何度も揉んだ。

「メグのぶよぶよしたおっぱいより、ずっと手ごたえがあるぞ」

鞭打たれて腫れた乳房は、軽く触れられるだけでも痛かった。けれど、凄絶な苦痛を体験したあとでは、我慢できないほどではない。

「いつの間にか、生意気なものまで生やしおって」

チャールスの手が下腹をざりざりところすって、股間の叢をつまんだ。

また乙女の深奥をうがたれるのかと、エレンは身体を硬くしたが、そこは表面をちよつとくじられただけですんだ。

チャールスは十フィートはなれて、巻き鞭を手に取った。

「脚を開け」

その命令に、エレンはおののいた。股間を鞭打たれるのだと判断した。

(きっと、ひと打ちで泣き叫んで……失神するかも)

ピシリ。鞭が地面を叩いた。

「脚を開け。三十発の鞭を望んだのは、おまえ自身だぞ」

それは違う。エレンは内心で反論したが、口には出さなかった。おそるおそる、一フィートほど足を開いた。

「もっとだ」

もう一フィート。身体が沈んで、肩に体重がかかった。手首を交差させられているので、吊られているロープにすぎることもしかない。脚で体重を支えようと踏ん張って、太腿の筋肉が小刻みに震えた。

チャールスは腕を横に広げた。

シュンツ……

鞭が奔った瞬間、エレンは目を閉じた。

パッシイン！

「きゃああっ……！」

打たれたのは股間ではなく腿の内側だった。それでも、叫ばずにはいられない痛さだった。

シュンツ……パッシイン！

反対側の腿も打たれた。膝が砕けて腕が引

っ張られた。

「きゃあ……！　ぐっ……」

鞭打たれた悲鳴に、肩の痛みを訴える呻きがつづいた。

肌が裂けるのを防ぐためか、痛みに馴れさせないためか、チャールスは同じ個所は打たなかった。二度目は膝の近くに鞭を巻きつけて少女を呻かせ、つぎは鼠蹊部すれすれに鞭を当てて盛大な悲鳴を引き出した。

「ひぎゃあっ……！」

少女の悲鳴を伴奏にして八発を打ち終わると、チャールスは後ろを向けと命じた。

エレンは、ほっとした思いで命令に従った。娘に甘い父親のイメージを心から拭いきれていない少女は、奴隷に対する主人としての、この男の酷薄さをじゅうぶんに理解していなかった。

ビューン……！

その凄まじい鞭の唸りに身をすくませた瞬間。鋭利な刃物で切り裂かれたような、焼けた鉄杭を押しつけられたような、形容しがたい激痛がエレンの背中を真っ二つに割った。

「が……！」

数秒、エレンは全身を硬直させて顎がはずれそうなほど口を大きく開けた。

「ぎゃああああーっ！」

凄絶な悲鳴が吐き出された。

(ママは……こんなのを五発も喰らったの!?)

「おまえも、母親に似て打たれ強いな。気を失わないとは、たいしたものだ」

それは感心している声ではなかった。少女をからかって愉しんでいるのだった。

「最後の一発だ。儂を失望させるなよ」

気を失うなという意味なのだろうと、エレンはぼんやり思った。あと一発で赦してもらえるのだと、気力を振り絞った。

ビュウン……！

最初と同じだった。風切音は聞こえるのに、身体を鞭打たれる音は聞こえなかった。凄まじい衝撃だけが背中を切り裂いた。

「ひぎゃああっ……！」

喉の奥から悲鳴を吐き出しながら、エレンはかすかな安らぎを感じていた。

(終わった……)

これからは粗末な食事と衣服しか与えられず、厳しい労働に追いまくられる日々がつづ

くのだろうけれど。今はもう、これで赦してもらえる。

「さて……口の詰め物を吐き出した罰が残っていたな」

きゅっと心臓が縮んだ。すっかり忘れていたけれど。もう。じゅうぶんに罰は受けていると思った。

「お願いします。どうか、もう赦して……鞭は、いや」

「わかっているとも。すなおで従順な奴隷は、やさしく扱ってやる。なに、罰と言ってもたいたものではない。これひとつだけだ」

チャールスは、ポケットに忍ばせていた洗濯バサミを取り出した。

ほう……と、エレンは安堵の息を漏らした。洗濯バサミでなにをされるのか見当もつかなかったが、そんなもので与えられる苦痛など高が知れている。

「ありがとうございます」

奴隷ならここで感謝の念を述べるべきだと、そう考えるだけの余裕が生まれた。

「ふふん……」

チャールスは片膝をついた。左手でエレン

の淡い金色の叢をかき分けて、秘裂が始まっている部分を、指の間にはさんだ。

「え……？ ひっ！」

股間にひそむ小さな皮の盛り上がりから、なにかが無理やりに押し出されるような感触。によるんと皮がめくり上げられた、はっきりした痛覚。それでいて、おしっこが漏れそうになる快感をともなっていた。

皮の盛り上がりの中に鋭敏な肉の核が埋もれていることを知らないエレンでも、その快感は知っていた。木登りをしていて、そこに枝の切り口が当たると気持ち良くなることを発見してママに教えてあげて、お尻をぶたれた。

しかし、場違いな快感に翻弄されていたのは数秒だけだった。洗濯バサミが近づいてきて、下腹部に隠れて……

「いやああああっ……痛い、痛い！」

鞭打ちとは異質の、もっと鋭利な激痛が股間の一点で炸裂した。

「ううううう……ひぎいい！」

痛みから逃れようとして腰を引きかけて、エレンはいっその激痛に襲われた。チャー

ルスは、洗濯バサミを持ったままだった。

「痛い、痛い……取って、これ取ってよ、パパ！」

奴隷風情が命令がましい口を利き、馴れなれしくパパと呼んだことを、チャールスは咎めなかった。彼には、あらかじめ定めているシナリオがあった。

「そんなに痛いのか？ 取ってほしいか？」

「痛いよ。取ってよ」

少女の切迫した哀願を無視して、チャールスが立ち上がる。

「どうしてよ。ほっとかないで。取って……お願いだから」

そこで、エレンの声が途切れた。自分の言葉づかいが奴隷にふさわしくなくて、それで願いを聞いてもらえないのだと気づいた。

「お慈悲ですから。どうか、この洗濯バサミを取ってください」

チャールスは、呆けたように見物しているジョンに歩み寄って、まだ胸に抱いていた乗馬鞭をもぎ取った。それで、洗濯バサミをチョンチョンと小突いた。

「ひいいい……お願いです。もう、虐めないで

……ください」

「洗濯バサミを取ってほしいのか？」

チャールスは、ゆっくりと罌を閉じにかかった。

「どうしてもと望むなら、この鞭で叩き落としてやろう。どうだ？」

「いやあ……！」

反射的に叫ぶエレン。

「いやなら、僕はかまわんぞ。いつまでも、洗濯バサミを着けている」

エレンは戦慄してうつむいた。この鋭い痛みは鞭と違って、ずっとつづいている。今にも気絶しそうなのに、あとからあとから湧いてくる激痛が、それを許してくれない。

あの慎み深いママを獣のように泣き喚かせたのだから、股間を鞭打たれる痛みは、これよりも激しいのだろう。

(でも、一瞬だけ我慢すれば……)

この、いつまでもつづく鋭い痛みから解放される。

迷いに迷ったあげく。エレンは顔を上げた。

「洗濯バサミを……鞭で叩いてください。お願いします、ご主人様」

心ならずも、肉体を虐めてほしいとみずから懇願してしまった。

チャールスがほくそ笑んだ。

ただ肉体に苦痛を与えるなら、この一幕は不要だった。徹底的な屈辱を味わわせてやらないことには、十五年以上も騙されてきた腹の虫が癒えない——というのは、母娘へ投げつける口実に過ぎない。牝奴隷、ことにエレンのような成熟前の少女をいたぶるのが、この男の病的な嗜癖なのだった。

「奴隷の切実な願いを聞き届けてやらぬほど、僕は無慈悲な主人ではない」

勝手なことをほざいて、チャールスは長い乗馬鞭をかまえた。

「もっと脚を開け」

今日だけで何回目になるのだろう。女に辱めを予告する命令を、チャールスが口にした。

エレンは、腿を打たれたときと同じように二フィートも脚を広げた。

ビュンツ……！

ぎゅっと目を閉じた直後。

バッシイインン……！

足が浮くほどの打撃が股間を襲った。

パチンッ！

洗濯バサミが弾け飛び、最後の瞬間に肉芽の先端をしたたかに噛んだ。

「ぎぎやあ……はっ……」

悲鳴は途中で切れた。股間に生暖かい液体が伝うのをおぼろに感じながら、エレンの意識は闇にとざされていった。

「ボス。食事の支度ができたと、さっきから女中が言ってますが？」

いつか、陽は平原の彼方に没しかけていた。食事にはまだ早い時刻だったが、チャールスたちはランチもとらずに町を駆けまわっていたのだ。

チャールスは、樹の枝から吊るされている二つの白い裸身を眺めた。

「折檻小屋へぶちこんでおけ。続きは飯のあとだ」

二体の牝奴隷を下ろしにかかった男たちを、ウィリアムが止めた。

「こいつのケツは、まだ使ったことがないんだろ？」

年嵩の牝奴隷の尻をぴしゃんと叩いた。ジェニィは身じろぎしたが、まだ意識を取り戻

していない。

「あたりまえだ。女房を相手に、そんな背徳的な真似ができるか」

「それじゃ、こいつは馬つなぎに縛りつけていてくれ」

「初物を奪われたか」

「親父こそ、ガキの初物を独り占めじゃないか」

居合わせた部下たちが苦笑した。しかし雇主に辟易したふうではない。

「心配するな。おまえたちにも分け前はやるよ」

ウィリアムが請け合おうと、彼らは嬉しそうにうなずいた。

3. 白人から奴隷に

樹の枝から下ろされたエレンは手首を縛られたまま、折檻小屋へ放り込まれた。小屋とはいわゆる、太い丸太を頑丈に組み合わせて作られた倉庫の趣きだった。床板は張られておらず、剥き出しの地面の一部に藁が敷かれていた。

その藁の上で、エレンは意識を取り戻した。
(ここは……?)

薄暗い小屋の奥に、黒い塊が浮かんでいた。エレンは息をのんだ。それは裸の男だった。手首と足首をひとまとめに括られ、捕獲された動物のように吊るされている。股間に大きな革袋がぶら下がっていた。

「エレオノーラお嬢さん……ですか？」

男から声をかけられて、エレンはぎょっとした。革袋から男の顔に視線を移した。その中年の奴隷に見覚えはなかった。

「いったい、どうして？ それに、その……裸でいらっしゃるのは？」

「あたしはエレオノーラでもお嬢様でもない。奴隷のエレンよ」

吐き捨てるように言ってから、ちっとも説明になっていないと気づいた。

「ママのひいお祖母様だったかな。その人が黒人だったんですって。だから、ママもあたしも黒人なの。あなたと同じように、グレイ家の奴隷なのよ」

要点を簡潔に述べる話し方は、無知な奴隷に語りかける主人のそれだった。

「こりゃまた、驚いた。へええ！」

男は無遠慮にエレンの裸身を見下ろした。乳房と太腿に刻まれた鞭痕には、とっくに気づいている。

「それで、さっそくの折檻てわけですかい。お気の毒にね」

ちっとも気の毒そうではなかった。さんざっぱら高慢ちきに振る舞ってきた報いだ。すこしは俺たちの痛みをわかったかね——と、そこまで言わなかったのは、彼もまだ困惑しているのだろう。

エレンは男から顔をそむけた。小屋を見まわして、言い知れない恐怖を覚えた。鞭打ちではすまされない重い罪を犯した奴隷や、仲間同士で諍いを起こした奴隷、手癖の悪い奴

隷などを懲らしめるための折檻小屋。それは、屋敷からも奴隷小屋からもはなれた荒野に建てられていた。通りかかったことはあるが、中を見るのは初めてだった。

間仕切りのない、広く陰鬱な空間。壁に掛けられた無数のロープや鎖と大小の枷。その下に置かれた火壺と焼き鋺。奴隷を縛りつけるために使うのだろうか、土間には何本もの杭が打ちこまれていた。目につく調度品は懲罰のための道具ばかりで、ベッドもテーブルもなかった。大小の丸太は何に使うのか見当がつかなかったし、小屋の隅に置かれた桶は、湯を張って身体を洗うには小さかった。

じょろじょろじょろ……ちいさな水音が、上のほうから聞こえてきた。

(まあ……！)

エレンは目を丸くして男を、正確には革袋を見上げた。放尿しているのだった。革袋は男の器官をすっぽり包んで、口元を紐で縛ってあった。つまり放尿して中身が増えていくにつれて、根元に負担がかかる仕掛になっていた。

女の人を吊るすときは、どうするつもりな

んだらう。そんな疑問が頭に浮かんで。はっと気づいた。小屋の隅へ行って、水汲みに使うには大きすぎる桶を覗きこんだ。中身は空だったが、異臭がしみついていていた。

テーブルで食事をとることもベッドで寝ることも許されないばかりか、トイレで用を足すことすら禁じられた環境に放り込まれたのだ。

(そうか……あたしは家畜なんだ)

理屈としてではなく、生活の実感に裏打ちされて、エレンはつくづく思い知った。

人間になにをされても、家畜には文句を言う権利がない。たとえば……

(メグのように?)

異母姉の顔が思考の片隅をよぎった。牝奴隷にメグを産ませたのは、その持主だ。そしてメグの処女を奪い、その証の焼印を下腹部に刻んだのも、同じ人間だった。

「おまえの白い下腹部にも、メグと同じ焼印を捺してやる」

チャールスの声が脳裡によみがえった。焼印の紋様も鮮明に思い出した。横長のハート枠に囲まれた S L A V E の文字。主人に抱か

れた証。

「まさか……そんな。そんなこと、パパがするはずがないわよ」

震える声で、エレンは自分にささやいた。
(違う。あの人はパパなんかじゃない。あたしの持主、ご主人様なんだ)

ご主人様に逆らってはいけない。人間が家畜を淫欲の対象にするなんて、褒められたことではないかもしれないけれど、指弾されるほどの不行跡でもない。そう……家畜を妻にするほどには。

エレンは自分で自分をどんどん追いつめていくのだった。

チャールスとウィリアムの父子が二人きりの侘しいディナーを終えて庭に出ると、デューズとその部下たちが、若主人に命じられた道具立てを準備して待っていた。

「ご主人様、エレンは無事なんでしょうか？」

乾いた血を全身にこびりつかせたジェニーが、娘の安否を訊ねた。

「おまえは、俺たちを愉しませることだけ考えていればいいんだ」

突き出した尻をぴしゃっと叩くウィリアム。ジェニィは足首をロープで左右に引っ張られて尻を突き出した形で、広げた腕を馬つなぎに縛りつけられていた。

「蚯蚓腫れがボコボコして、触り心地が悪いな。全体が腫れるまで鞣してやるべきだったかな」

残照に照らされてピンク色に染まった尻を両手で撫でまわすウィリアム。

「まったくもって、おまえはでかいケツが好みだな」

「しょうがないだろ。親父の仕込みがよかったんだ」

●五歳の誕生日にウィリアムが父親からもらったプレゼントは、二十五歳の牝奴隷だった。従順で豊満で性技に長けていた。以来、彼は年上の女を好むようになったのだった。

「アナルまでは教えなかったぞ」

父親が苦笑した。

「だって、前の穴は親父の使い古しじゃないか」

ウィリアムは注射器の化け物のような器具を手にとった。牛馬に使う浣腸器だ。それで、

桶に入れた腐りかけの牛乳を吸い上げた。

何をされようと黙って受け容れるしかない
と観念しているジェニィは、冷たい嘴管を肛
門にあてがわれても、ぴくっと身体を震わせ
ただけだった。しかし、その太い先端を押し
込まれかけると、悲鳴をあげた。

「ひいい……痛い！ 無理です、そんな太い
物、とてもはいりません」

「はいるとも」

腕に力をこめて押し込むウィリアム。ずぶ
っと、嘴管がジェニィの体内に埋没した。

「くう……熱い！」

痛覚と熱覚が同時に刺激される。

「いま冷ましてやる」

ウィリアムは左手でシリンジをさらに押し
つけながら、プランジャに体重を乗せて押し
た。一ポイント（約五百ミリリットル）ほど
の腐りかけてヨーグルト状になった牛乳が、
ジェニィの腸に流し込まれた。

同じ作業がさらに三回繰り返されると、ジ
ェニィの腹は妊娠しているみたいに膨れてい
った。

「ぐうう……お、おなかが……」

注入されているときから、ジェニィは猛烈な腹痛と便意に襲われていた。けれど人前で排泄するなど、獣や家畜ならいざ知らず、人間の女性にできることではない。

永遠に我慢できるはずがないとわかっているにもかかわらず、ジェニィは肛門を必死に引き締めて破局の瞬間を先へ伸ばそうとつとめた。

「あううう……」

陽が落ちて冷たくなってきた風に晒した裸身に脂汗を浮かべながら、ジェニィは無意識のうちに腰を左右へ振り立てた。

垣根越しに見物している奴隷は、もうひとりもいなかった。女中や家僕も屋敷の中で息をひそめていた。馬つなぎのまわりに集まっているのは、デュースたち奴隷監督と、その配下ばかりだった。男たちはにやにや嗤いながら、尻振りダンスを鑑賞している。

やがて。十五分も経っただろうか。

びゅるっ……と、白い筋がジェニィの尻から迸った。

ぶっしゃあああ……白い筋はたちまち太い奔流となって空間に弧を描いた。ぼたぼたと、茶色の塊がいくつも芝生に転がった。

ヒュウヒュウと、男たちが口笛を吹き鳴らした。

「いやあ……見ないでえ！」

ジェニイは泣きながら訴えたが、耳を貸す男などいない。

奔流はやがてせせらぎに細り、最後には肛門から雫がしたたり落ちるだけになった。

ウィリアムは別の桶から浣腸器に水を吸い上げて、ひそやかに涙をこぼしている牝奴隷の腸内洗浄にかかった。

ジェニイには、もう便意をこらえる気力がない。最初の注入を終えるとすぐに、薄く茶色味を帯びた水を噴出してしまった。

二度目の洗浄で、肛門から吐き出される水は透明になった。ウィリアムは男たちに命じて、ジェニイの背後にボロ布を敷かせた。それは母娘から剥ぎ取った衣服だった。

半日前までは義理の息子だった青年に犯されるのだとは、覚悟してあきらめているジェニイだった。冷たく粘っこいものを肛門に塗り込められても、軟膏のたぐいだろうとしか思わなかった。

近親姦と同様に『ソドムの罪』もまた神の

教えに背くものだという事くらいは知っていたが、それが具体的にはどういう行為なのかを、ジェニィは知らない。『前』とか『使い古し』とかいう父子の会話から、まさかと思わないでもなかったが、自分の考え過ぎだろうとさえ思っていた。

しかし。欲望に熱く滾り勃った陰部（奴隷らしく表現するならコック？）を肛門に押しつけられては、理解しないわけにはいかなかった。

「そこをそんなふうに使っては、いけません。天罰がくだされます！」

侵入を拒もうとして、ジェニィは肛門に力をいれた。

ウィリアムは牝奴隷の背中におおいかぶさって、左手で乳房を驚づかみにした。

「主人のすることに文句を言うな。口を閉じてケツの穴を広げろ」

もぎ取られそうなほど乳房をひねられても、ジェニィは暴れ馬のようにもがいて背徳の門への侵入を拒んだ。

「こんなこと……野生の獣でもしません！」

「おまえは主人を獣だと言うのか？」

ひねられた乳房が、さらに下へ引っ張られた。それでもジェニイは抵抗をやめず、みずから乳房を虐めるように全身を揺すった。

「ぎひい……けっして、そんなことは。お慈悲ですから……」

「おまえの娘に代わりをつとめさせてもいいんだぞ」

ぴたっと、ジェニイの動きが止まった。

「おお……むごいことを。わかりました、お好きなようにしてください。地獄にはわたしが落ちます。ですから、どうか娘には……」

「約束してやるよ。俺はエレンには指一本触れない」

ふうっと、ジェニイの全身から力が抜けた。ところを、ウィリアムの剛直が貫いた。

めりめりっと、排泄孔を押し割られる音をたしかに聞いたと、ジェニイは信じた。

「うがはっ……ああ……！」

口を大きく開けてのけぞり、ジェニイは灼けつく激痛に耐えた。

「奥は柔らかいが、締りは悪いな」

ウィリアムが不満そうにつぶやく。

「アヌスとは、そういうものだ。だから、何

十分でも愉しめる。逝くときはドアの裏側を使え」

息子の教育に熱心な父親もあったものだ。括約筋の締りを利用しろと、適切だがとんでもない助言をする。

「そう長くも遊んじゃられないんだろ。明日は早起きしなくちゃならない」

ウィリアムは逸物を三分の二ほども引き抜いて、性急なピストン運動を始めた。

「なるほど……入口は凄く締まる！」

射精の瞬間にはまた深々と貫いて、ウィリアムは欲望を腸の奥深くに吐き出した。

「あとは、おまえたちで好きにしろ」

ウィリアムはズボンを穿きながら、取り巻いている男たちに声をかけた。

「時間が余れば、部下たちも遊ばせろ。どの穴を使ってもかまわない。そうだな、親父？」

うおおっと、奴隷監督たちが歓声をあげた。

ああ……と、声にならない悲鳴を漏らして。ジェニィはうなだれた。自分でも忘れていた過去をあばかれ、奴隷に墮とされ、母娘そろって過酷な折檻を受け、あまつさえ神の教えに背く行為を強制されて。慈悲を乞う気力す

ら、ジェニイには残っていなかった。

それでもまだ……生き地獄の初日は終わっていないのだった。

ほとんど闇にとざされた小屋の片隅に、エレンはたたずんでいた。敷き藁に座ると鞭打たれた尻が痛み、藁の先端が太腿の腫れをつついた。壁にもたれかかると、切り裂かれた背中への傷口に丸太のささくれが突き刺さった。

(あたし……ほんとうに……メグと同じ扱いを受けるのだろうか?)

さまざまな想念は、いつもそこに戻ってくる。そんな目に遭わされるくらいなら、今すぐ死んでしまいたい。けれど、自ら命を絶つことは神様が禁じていらっしやる。それほど信仰心の篤くないエレンだが、死への恐怖と神の定めた禁忌を同時に踏み越える蛮勇は持ち合わせていなかった。

(あたし……どうすればいいんだろう? どうなるんだろ?)

何十回目かの問いを心にめぐらせたとき。エレンは足音を聞きつけた。折檻小屋に設けられた小さな窓から屋敷の方角をうかがった。

チャールスとウィリアムが、こちらへ歩いてくるのが月明かりの中に見えた。いや、もうひとり。素裸の女性が、首に巻かれた縄で引き立てられている。メグだった。縛られているのだろう、手を後ろにまわしていた。

その取り合わせの奇妙さが、エレンを戸惑わせた。

一行はゆっくりと近づいてきて。角材を組み合わせた格子扉が開かれた。ウィリアムが、持ってきたランタンの灯を小屋のランプに移した。

「待たせたな。おまえの番だ」

チャールスが背後にまわって、エレンの手首を扼しているロープをほどいた。

「あたしの番って……？ ママは、ママはどうなったの？」

エレンは押し倒された。

「奴隷監督たちと楽しく遊んでるよ」

馬乗りになったウィリアムが『遊んで』を強調して言った。

「な……」

エレンは絶句した。

ウィリアムに両手をつかまれて、エレンは

振りほどこうとして身をもがいた。

「あばれるな」

ずんっと体重を腹にかけられて。エレンの腕から力が抜ける。土間に打ちこまれた杭に四肢をX字形に開いた姿で縛りつけられるあいだ、エレンはまったく抵抗しなかった。

(だって……縛られてたほうが、ましよ！)

ランプの薄明りの中でぎらぎら光る男たちの目の色に気づいて、エレンは自分の運命を悟っていた。手足が自由でいて、父親に犯されても抵抗しないなんて……それでは、彼女自身が父親の行為を受け入れていることになりはしないだろうか。抵抗を封じられて犯されるのなら、神様だって赦してくださるかもしれない。

エレンは腰を持ち上げられて、直径が二フィート（六十センチ）もある丸太に乗せられた。

「くう……」

杭に縛り付けられた四肢がぴいんと引き伸ばされてエレンに新たな苦痛を与えたが、反面、傷ついた背中が浮き上がって、そちらの痛みは薄らいた。

苦痛はともかく。大股開きの股間を高く突き出した姿勢は、エレンに羞恥をよみがえらせた。抵抗を封じられているのだから、何をされても仕方がないと――割り切れるものでもない。

「やだ……こんなの、恥ずかしい。見ないでよ……やだったらあ！」

チャールスもウィリアムも、エレンの懇願には一顧も与えない。ウィリアムが壁際へ行って、小さな棚をごそごそかきまわした。

「いや、それはいらん」

「趣味が変わったのかい？」

ウィリアムは剃刀とシャボン容器を棚に戻した。

「試してみたいと思っていたことが、ひとつあった。メグの毛は短くて無理だったが、こいつのは薄くても長い」

「短くしたのは誰なんだい？」

ウィリアムの言葉は、家長への口の利き方ではなく、淫靡な愉しみを分かち合う共犯者のそれだった。

肩をすくめて。チャールスはマッチを取り出した。

シュボッ……小さな炎で、身動きできない少女の股間をゆっくりと撫でた。たちまち、白い肌の上で金色の淡い叢が燃え上がった。

「ひゃああ……熱い！ 消してよう！」

叢がチリチリと燃えて、毛の焦げるいやな臭いがあたりに立ちこめた。

「やめて……パパ、赦して！」

悲鳴が消えるまでに、股間の山火事も消えていた。叢は燃え尽きて、秘裂も突起を包むフードも、余すところなく男たちの目に晒された。白い肌には点々と黒い燃え滓が散っていたが、とくに火傷した様子はなかった。

「なるほど。炎は上へ昇るから、一瞬なら大丈夫ってわけか」

ウィリアムが、感心したように言った。

「しかし、この娘は大丈夫じゃなさそうだぜ。真っ青になって震えてやがる」

「ふむ……」

チャールスはマッチの軸を投げ捨てて、その指でエレンの秘裂をえぐった。

「い、痛いっ……」

乾ききった穴を乱暴にくじられて、エレンは小さな悲鳴をあげた。実の父親に凌辱され

ているという背徳の思いが、大声を控えさせていた。

「なるほど。初夜の営みどころではなさそうだな」

エレンに確実に理解させて恐怖をあおるつもりか、わざと上品な言葉を選ぶチャールス。「メグのときのように、泣き叫ぶのを力づくで犯すのも面白いが……こいつは、ずいぶんと大切に育ててきたからな。最後までやさしく扱ってやろう」

その言葉を聞いて、エレンは安心するどころか不安をつのらせた。果たして。

「は行って来い、メグ」

それまで小屋の外で待たされていた娘が、ひっそりと姿を現わした。

「おまえの妹が心地よくコックを嵌められるようにしてやれ」

メグは首の縄を引かれて、X字形に縛りつけられている妹の股間にひざまずいた。手は後ろで鎖に巻かれている。初潮を迎えて半年もしないうちに処女を奪われ、チャールスの子を孕みそうにないの見切りをつけられてからは客人の慰み者にもされて、さまざまな性

技を仕込まれてきた娘は、主人の言葉の意味を完璧に理解していた。それだけに、恨みがましい目で主人を見上げた。

「それとも、妹にも地獄の貫通式を味わわせてやるか？ そんな薄情な姉には、それなりの罰を与えてやるぞ」

メグは悲しそうに目を伏せて、妹の股間にすっと顔を近づけた。腕を絡めた鎖が、カチャリと鳴った。

吐息を股間に感じて、まだエレンには何が起きようとしているのかわからなかった。性器に口づけるなど、彼女の想像の埒外だった。

ピチョ……ぬめっとした弾力のある生暖かい感触に秘裂を割られて、エレンは戸惑った。チャールスのごつごつした指と違って不快ではないが、なんとなくおぞましい感触。

弾力のある異物がぐにゅっと動いて、秘裂に埋もれた花卉の中にまで侵入してきた。と同時に、太腿に触れたのは――メグの頬だった。エレンは、自分が何をされているか理解した。

「やめて！ 汚いわ……」

エレンは半狂乱で叫んだ。

「そんなとこ、舐めないで。恥ずかしい、汚いわよ」

エレンの声を無視して、舌は花卉の中を掻きまわした。

(……………?)

きゅんっと、腰の奥に不思議な感覚が生じた。けれど、強い禁忌感がそれを打ち消した。

「おい、妹が汚いと言ってるのだぞ。きれいにしてやれ」

エレンの言葉を逆手にとって、チャールスがけしかける。

メグは主人の言葉に従順に従って、ふっくらした土手と花卉のすきまに舌を這わせた。舌をぐっと突き出して、溝を舐めあげる。

「汚れを妹に見せてやれ」

メグは舌を突き出したまま妹の顔に近づけた。薄明りの中に浮かび上がる濃いピンク色の肉片。その先端にクリームチーズのような白い半固形状の物がこびりついていて、つんと鼻をつく臭いも腐りかけのチーズに似ていた。

それが自分の股間にひそんでいた垢の塊だ

と気づいて、エレンは顔をそむけた。

「やだ……汚いっ！」

「汚いものを吐き捨てて、小屋を汚すんじゃないぞ」

メグは舌を口中に戻すと、ごくんと喉を上下させた。

（うえ……）

見ているだけで、エレンは吐き気をもよおした。汚いところを舐めるだけでなく、そこに溜まっていた垢を食べるなんて。

（でも……）

もしも主人の命令にさからって吐き捨てたりしたら。メグの股間を舐めて垢を食べると、洗濯バサミとか鞭とかと……自分なら、どっちを選ぶだろう。

ぺちよ……ふたたび股間に舌を這わされて、エレンは自らへの問いに答える時間がなくなった。

「唾で濡らせばいいってものではないぞ。感じさせてやれ」

メグの舌が、秘裂に沿って上へ動いた。

「あ……」

秘裂の合わさっているあたりにある小さな

皮の隆起を刺激されて、エレンの腰がぴくんと跳ねた。

メグの鼻が下腹部に押しつけられた。コリッと皮を噛まれる。噛むというより歯を使って皮を押し下げている。

によるんと、皮に埋もれている突起が剥き出される感触。

「ひゃんっ……！」

チャールスの指で剥かれたときよりも、痛みは小さかった。

「うあ……やめ、それ……やめて」

突起の先端をチョンチョンとつつかれて、腰から背筋にさざ波が奔った。おしっこの漏れそうな感覚が一気に高まる。腰の奥深くに熱が溜まって、それがじわつとにじみ出てくるような錯覚があった。

(これ……あのときと同じ)

昔の記憶がふたたび、いっそう鮮明によみがえった。女の子だてらに木登りをしていて、枝を切った瘤に股間をこすられて……そのときの何十倍もの快感。

メグの舌が突起全体に柔らかく絡みついてくる。刺激されるたびに肉芽が硬くしこって

いくのが、乳首が痛いほど隆起していくのが、自分でもわかった。

「あ……あ、あ……ひい」

エレンの呼吸がだんだん早く浅くなってきた。ぴくんぴくんと、舌の動きに合わせて腰が跳ねる。

そんな妹の動きを冷静に観察しながら刺激を強めていくメグ。妹の股間からあふれた蜜で、口のまわりはべっとり濡れている。

「そこまでだ」

チャールスが横合いからメグの肩を蹴って土間に転がした。

経験はなくても、こんな状況でつぎに何が起こるか、エレンでもわかる。チャールスがおおいかぶさって身体を重ねてくる。

「おお、神様。お赦してください」

エレンは小さくつぶやいて目を閉じた。奴隷に、主人の行為をとがめる権利などない。

太くて硬い物が花卉を割ってぎちぎちと侵入してきて——ずぐっと、行き止まりを突き破った。

「ううう……痛いっ……！」

それは鞭の切り裂くような一瞬の痛さとも、

洗濯バサミの鋭く持続する痛さとも、乳房を握りつぶされる痛さとも違っていた。花卉の奥で鈍い痛みが急速に高まって行って、パチンと弾けた瞬間、身体をまっふたつに引き裂かれたような鋭い痛み。もしも昨日までのエレンだったら、大声で泣き叫んでいただろう。しかし、苦痛の洗礼を半日にわたって受けてきた少女は、奥歯を噛み締めて涙をにじませただけだった。

鋭い痛みはゆっくりと引いていった。

「たいして痛そうではなかったな。まさか？」

ぬぷっ……チャールスは怒張を引き抜いた。それが血にまみれているのを見ると、満足そうにうなずいて。ぎしっと、無雑作にエレンをふたたび貫いた。

「ひぎっ……」

痛いのは最初の一回だけと奴隷女たちが話しているのを聞いたことのあるエレンは、この挿入を二回目と考えて、最初と変わらない痛さに驚きの混じった悲鳴をあげた。

ずん、ぬぶ、ずん、ぬぶ……チャールスがゆっくりと腰を動かし始めた。そのたびに、エレンは新たな痛みにさいなまれた。しかし、

抽挿が繰り返されるうちに痛みは小さくなっていった。

ずにゅ、ずぶ、じゅぶっ……音が次第に湿り気を帯びてくる。物理的な刺激によって絞り出された蜜に破瓜の出血が加わって、エレンの膣はぬかるみと化していった。

ぱんぱんぱん……下腹部を打ちつけられて、エレンは顔をしかめた。丸太に押しつけられている腰を上下に揺すられて、肌が擦れた。ちくちくと鋭い痛みは、ささくれが突き刺さっているのだろう。

チャールスは、土間に張りつけられている少女の苦痛にはおかまいなしに、腰を激しく打ちつけた。しかし、まだ精を放つつもりはないらしく。

「さすがに、締まりがきついぞ」

動きを止めて、エレンに体重をあずけた。土のついた掌で双つの乳房をつかんで、上体をわずかに浮かせた。

「うぐぐ……」

自分の体重の二倍近い重みを加えられ、痣だらけの乳房をこねくられ、のけぞって呻くエレン。胸を圧迫されて、息が詰まりそうだ

った。

「顔をこっちへ向けろ。キスしてやる」

エレンは、その傲岸な命令におとなしく従った。唇をかぶせられ、舌で歯を割られて口の中を掻きまわされても、顔をそむけようとはしなかった。

(あたしはご主人様の奴隷なんだから)

ご主人様の好きなように弄ばれる存在なのだ、エレンは心の中で自分に言い聞かせていた。眉間に嫌悪の皺が寄るのまでは抑えられなかったけれど。

「口を開けろ」

エレンは、その命令にも従順だった。何を詰められるのかと――犯されている間ずっと閉じていた目を薄く開けた。真上にあるチャールスの口元に、泡立った唾液があふれていた。それが、ランプの光を照り返してつうつと垂れてくる。

エレンは口の中に落とされた唾液を、命令される前に飲みこんだ。メグが食べさせられた汚物よりは、ずっとましだと思った。なのに、涙で視界がにじんだ。

ほう――といった感じでチャールスが片眉

を動かした。褒美として快感を与えるつもりか、乳房を握る手の力を緩めて、親指の腹で乳首を転がした。

エレンはふたたびまぶたを閉じて、乳首に走った悪寒を耐えた。

エレンの乳房に体重をあずけたまま、チャールスが腰の動きを再開した。

ぱん、ぱん、ぱん、ぱん……。

乾いたリズムカルな音が小屋に響いた。

「く……ひっ……ぐう」

エレンの呻き声を調子はずれな切れぎれの伴奏にして。

数分もすると、乾いた音のピッチが早くなって。

「う……」

チャールスの低い唸り声。エレンの中でペニスが脈動し、奥に滾りを叩きつけられたのがわかった。男女の交合の、その目的が達せられたのだった。

チャールスはすぐに立ち上がって、小屋の隅にうずくまっているメグを呼びつけた。ひざまずかせて、まだ萎えきっていないペニスを鼻先に突きつける。

後ろ手に鎖で扼されたメグはそれを口に含んで汚れを舐めた。

自分のせいで汚れた男性器を姉に掃除させて、申しわけないとエレンは思う。破廉恥だとは、もう思わなかった。自分だってチャールスの唾液を飲んだのだから。

そしてエレンは、姉以上の屈辱にさらされた。手首は杭に縛りつけられたまま、ウィリアムの手で屋根の梁から逆さ吊りにされたのだ。

「子宮の奥まで子種を流しこんでやる」

五十歳も近いというのに、メグの口唇清掃で元気を取り戻したペニスをズボンに押し込んでから、チャールスは逆さ吊りにした少女の閉じた腿の付け根をぺちぺちと叩いた。

「可愛い娘を孕め。将来が愉しみだ」

エレンの心臓が凍りついた。

(まさか……!?)

「男なんか産んだら、売り飛ばしてやるぞ」

主人と奴隷の間にも子供は生まれる。それが自分の身にも起こり得るのだとは、たった今まで考えたことはなかった。メグは父親でもある主人の子供を孕まなかったが……もし、

孕んでいたら。女の子だったら……メグの娘は父親でもあり祖父でもある主人と……

「そんなの、いやああああっ！」

エレンは絶叫した。

「ひどいよ、パパ。獣だって、そんなことはしないわ。いやよ、赤ちゃんなんか産まない」

今まさに直面している妊娠への恐怖と、生まれた子が祖父でもあり父親でもある男に犯されるという、将来への恐怖。ふたつが緋い交ぜになってエレンを狂乱させていた。

「こいつ、まだ自分の立場をわかっていないね」

ウィリアムが、土間に張りつけられている少女の顔を靴で踏みにじった。

「火をおこそうか？」

「ふむ。母娘をならべてとっておったのだが……あっちは、まだかかりそうだな」

ウィリアムが、三脚で支えられた小さな炉と石炭を小屋の外へ持ち出した。

「お願いします。ご主人様の命令にはなんでも従います。従順な奴隷になります。だから……あたしに娘が生まれても、手は出さないでやってください。ねえ、聞いているの？」

チャールスが苦笑した。

「それが奴隷の言葉づかいか？」

ウィリアムに踏まれなかったほうの頬に靴底を当てて、ぐりぐりと踏みにじった。

「もぶしわへあひばへん……きぼつへばす」

五分もしないうちにウィリアムが戻ってきた。火壺の中では石炭が赤く燃えている。そこへ焼き鑊を突っ込んだ。

「そ、それって……」

焼けた鉄を肌に押しつけられる恐怖。奴隷の刻印を刻まれる絶望。エレンの唇がわなわなと震えた。

「黙っている。これは命令だ。おまえは良い奴隷になると誓ったな？」

赦しを乞うことさえ封じられて、少女は恐怖に見開いた目で父子の作業を見守るしかなかった。

チャールスが、焼き鑊を火壺から引き抜いた。薄闇の中に赤く輝く横長のハート形と、そしてS L A V Eの鏡文字。下腹部の逆三角形を狙って、肌に触れる瞬間の温度を勘で調節しながらゆっくりと焼き鑊を近づけていく。

「動くなよ。暴れたら文字が崩れるし、火傷

も広がるぞ」

肌に焼き鑊の熱を感じて、少女の歯がカチカチ鳴った。

「あああ、ああ……ぎゃわあああーっ!!」

少女の華奢な喉から吐き出されたとは信じられない絶叫。

焼き鑊は、繊細な刻印をつぶさないよう、悲鳴が途絶える前に肌からはなされていた。股間からちょろちょろっと漏れ出た小水が、火傷のくぼみにそって流れていく。

「これはいい。消毒の手間が省ける」

「メグもベティも失禁しなかったぜ？」

「ふむ。それもそうか」

そんなことを言い合いながら、二人は失神しているエレンを土間に下ろした。手首の縄もほどいて上体を引き起こし、背後で腕を重ねて鎖で巻いた。小屋の壁に少女の背中をもたせかけておいて、刻印された下腹部にチャールスが放尿した。

――脇腹を蹴られて、エレンは東の間の安息から地獄に引き戻された。エレンとチャールス父子との間に、ジェニィの姿があった。土間にX字形に張りつけられていた。腰に丸

太をあてがわれて下腹部を突き出しているのも、エレンのときと同じだった。

「これから、お前の母親にも焼印を捺す。悲鳴をあげずに耐えるそうだ」

従順な奴隷とはどういうものか、母親を見習えとチャールスが言った。すこしでも声を出したら、おまえの娘の乳房に別の焼印を捺すぞと脅したことは黙っている。

ジェニィの裸身は、娘よりはるかにひどく傷ついていた。鞭打ちの痕だけはない。太腿を凄絶に彩る鮮血は、肛門に裂傷を負った証だった。秘裂は、小屋まで歩かされる間にほとんどが垂れ落ちたにもかかわらず、まだ白濁で埋まっていた。顔は泥だらけで、口からは血を流していた。それは、エレンが犯されたと知って元夫をなじったためだった。

「約束どおりだぜ。俺は、おまえの娘には何もしなかった」

ウィリアムは継母だった牝奴隷を土間に張りつけたあと、その顔を踏みにじり、何度も蹴とばしたのだった。

赤く輝く焼き鑊をウィリアムが火壺から取り出して、牝奴隷の大きく開かされた脚の間

に立った。

ジェニイは顎を宙に突き出すようにして目を閉じた。歯を固く喰いしぼる。

ウィリアムはゆっくりと焼き鑊を牝奴隷の白い下腹部へ近づけていく。その熱で鬨りを焼き払ってから。

ジュウツ……かすかな煙がたちのぼった。

「んむっ……！」

押し殺した呻き声。ジェニイは、はあはあと荒い息づかいを繰り返した。

ウィリアムがズボンをずり下げて、牝奴隷の股間へ放尿した。火傷の初期治療には冷却が重要だが、淀んだ汲み置き水などで洗うとケロイドが残りやすい。つまり、焼印を捺す目的にかなった処置とはいえた。もちろん、奴隷を辱めて、自分が絶対的に支配されていることを思い知らせる目的が第一ではあったが。

ジェニイも磔から引き剥がされて、背中で腕を縛られた。ウィリアムに引きずられて、娘の隣に並んで裸の尻を土間につけた。

「傷が落ち着いたら母親は寡婦小屋、娘は繁殖小屋だ。今のうちに名残を惜しんでおけ」

父子はメグに命じて、梁から吊られている奴隷男の股間から皮袋をはずさせた。メグが外へ行って皮袋の中身を捨てて井戸水を汲んで戻ってくるあいだに、ウィリアムが奴隷男を土間に叩きつけるような勢いで吊り下ろした。

革袋の水を母娘の下腹部に流し掛けてから、父子はメグと奴隷男を追い立てて小屋から出ていった。脚が萎えてひとりで立てない奴隷男に肩を貸したメグは、その重みによるめきながら、小屋に残される二人をちらっと振り返った。夜の闇の中で、ふたつの瞳が悲しそうに瞬いた。

4. 父親への性奉仕

ふたりは、長いこと沈黙をつづけていた。いきなりの、ナイアガラ滝よりも大きな落差の転落。慰め合う言葉も、励まし合う言葉も、あろうはずがなかった。

「天にまします我らの父よ」

長い沈黙の末に、ジェニイの口から低い祈りが紡がれる。

「我らの希望を明日も与えたまえ、我らを犯すものを我らが……我らが……赦すごとく」

そこから先は、エレンには聞き取れなかった。

「……アーメン」

「ママのひいお祖母様が黒人だっていうのは……本当にほんとなの？」

祈りが終わるのを待って、エレンがささやくように訊ねた。

「……子供の頃、黒人の男の子と喧嘩して泣かされたの」

数分の沈黙のあと、ジェニイが、これもつぶやくように答えた。

「黒人のくせに生意気だって父に言いつけた

ら、おまえの曾祖母だって黒人だったんだぞって叱られた」

沈黙の間に話すべき言葉を選んでいたのでろう。ジェニィの語りは抑制されていて滑らかだった。

「曾祖母が奴隷監督に犯されて産んだ娘は別の農園へ売られて、そこで白人の使用人と恋仲になって北部へ脱走して……もちろん正式の結婚まではできなかったのだけど、幸せに暮らしてわたしの父を産んだ。父は混血とわかる肌の色と顔つきだったのに、白人の娘と結ばれたの。でも、母は私が六つのときに結核で亡くなった。父のことを良く思っていなかった母の家族は父を追い出して——これは、父の希望でもあったのだけど、まったくの白人にしか見えないわたしは、養子に出された。ああ、これは別れる前の晩に父が話してくれたことよ。すっかり忘れていたわ」

忘れようと努めたのかもしれない。エレンは、ちらっと思った。ここから後のことは、エレンもなんとなく知っている。

ジェニファーを養子にしたアンダーソン夫妻は、新天地を求めて南部へ移住した。そう

して、ジェニファーはチャールス・グレイと結婚してエレオノーラを産んだのだった。

エレンは知らなかったが、ジェニファーが歳のはなれたチャールスと結婚したのは、養父母への恩返しの意味もあった。新しい土地での商売に失敗した夫妻は、チャールスから出た支度金を使って、慣れ親しんだ北部へ戻っていったのだ。エレオノーラとは縁が切れたも同然だった。

「あたしは白人じゃなかったんだ」

母の口から聞かされた真実に打ちのめられて、エレンがつぶやいた。

「それでも、わたしたちが人間にあることに変わりはないのよ」

「違うわ。あたしたちは人間じゃない。奴隷の地位がふさわしい劣等人種だわ！」

エレンは、母親の言葉を激しくさえぎった。まるで、なじっているような口調だった。

「……あたし、ご主人様に褒めていただけるような奴隷になる」

偏見に凝り固まった白人社会で育てられてきた少女は、本気でそう決心したのだった。

それは間違っていると（少女よりは広い見

識と宗教的な信念とに基づいて) 考える母親だが、娘を説得する言葉までは出てこなかった。

ふたりは敷き藁に身を横たえ、ときどき身体の向きを変えて痛みを耐えながら、夜明けを迎えた。母娘の身体が触れ合うことは一度もなかった。

陽が地平線からはなれて間もなく。チャールズがひとりで折檻小屋に姿を現わした。水を入れた浅い小さな甕を、便器代わりに桶の横に並べた。

「一日分の水だ。そのつもりで飲め。食事は、これだ」

バケツから生のトウモロコシを取り出した。「手が使えなくては食べまい。口を開けろ」エレンが敷き藁から体を起こして、チャールズの前にひざまずいた。主人を仰ぎ見て、従順に口を開けた。ぐぼっとトウモロコシを喉の奥まで突っ込まれて、小さな呻きを鼻から漏らした。

娘に機先を制せられて、ジェニィは抗議の機会を失った。娘にならって、ひざまずいて

口を開いた。

「トウモロコシは、一日に二本だ。こっちも農が食わせてやる。うつ伏せになってケツを上げろ」

「……………!!」

母娘が同時に、目を見開いた。すでにエレンも、言葉に隠された意図を理解するに足る経験を積みされていた。エレンは腰を浮かして上体を倒していき、バランスを崩して横ざまにひっくり返った。ジェニィはトウモロコシを口に咥えたまま身体を二つに折ってから肩を土間につけて、膝を後ろへ引いた。エレンはいちど腹這いになってから、膝を引きつけて尻を上げた。

「娘に手本を見せてやれ」

チャールスが左手でジェニィの花卉を割り広げて、まったく潤いのない穴に、右手に握ったトウモロコシをねじり挿れた。

「んぐっ……」

ジェニィの苦痛を訴える呻きにはかまわず、ぐりぐりと左右にねじりながら突っ込んでいく。肉の壁に先端が突き当たっても、チャールスはまだトウモロコシから手をはなさない。

上下左右に細かく動かして子宮口をさぐり、ぐいと押し込んだ。

「むぐうーっ……！」

ジェニィの膝から先が宙に浮いて、ぷるぷると痙攣した。

エレンは左に顔をひねって土間に頬をつけていたので、トウモロコシが茎の部分を残して母の股間に埋没したのが、はっきりと見えた。

「さて、つぎは娘の番だ。おお、塩分も補給してやらんとな」

バケツの底から塩をつかんで、トウモロコシにたっぷりとまぶした。それを、まだ破瓜の傷が癒えていない股間に、無雑作に押し挿れようとする。

めりめりめりと、処女を奪われたときよりも激しい、身体を引き裂かれるような痛み。ペニスよりもはるかに太くて長い物体を受け挿れるには、エレンの身体は稚なすぎた。

「ぐぎいっ!!」

エレンは歯を喰いしばった。そのとき。

ボキッ……！

口の中のトウモロコシが折れた。歯を噛み

合わせた衝撃で、トウモロコシが喉の奥深くまで押し込まれる。

「ん……んん、んん！」

トウモロコシに喉をふさがれて、エレンは息を詰まらせた。息を吸うことも吐くこともできなくなった。エレンの青白い顔が、たちまち赤く染まっていく。

「この馬鹿が！」

異変に気づいたチャールスは、土間に転がった半分のトウモロコシを見て事情を悟った。エレンの顎をこじ開けて、トウモロコシをつまみ出そうとする。しかし、彼の太い指はトウモロコシをさらに奥へ押し込む役にしか立たなかった。

チャールスは、エレンの足首を握って立ち上がった。左腕を高々と差し上げて、片脚だけでエレンを宙吊りにする。

どすんと、右のこぶしでエレンの腹部を殴った。

「ぐえっ……！」

エレンは苦痛にのけぞった。異物に喉の奥を刺激されて起きる嘔吐反射に加えて、腹筋の激しい動きが、トウモロコシを押し戻した。

「げええええ……」

トウモロコシの先端が、ぼてっと土間に転がった。よだれと胃液で、エレンの顔はぐしょ濡れになった。

「あ、ありがとうございます」

はあはあと息を吐きながら、エレンは感謝の言葉を口にした。それは――奴隷ならそうすべきだと考えたからではなかった。本心からの言葉だった。

屋外で全裸に剥かれて鞭打たれ、縛られて犯され、生涯消えることのない焼印を下腹部に刻まれて。奴隷としては、そのすべてを受け入れるしかないと自分に言い聞かせても、心の奥底でこの男への憎悪がつのっていきのは止めようがなかった。しかし。この男は自分を殺さない。生命の危機に瀕したときは助けてくれる。その認識が、憎悪をやわらげてくれた。

しかし、少女の甘ったるい感傷をあざ笑うかのように。チャールスはあらためてトウモロコシを拾いあげると、片脚吊りにした少女の股間に垂直にあてがった。

エレンは顎に力をいれて、自分に襲いかか

るだろう激痛にそなえた。そのときだった。腰の奥に、エレンはささやかな熱のようなものを感じた。あるいはそれは――肉体を異物の侵入から保護しようとする反射作用だったのかもしれない。しかし、被虐への予感がエレンを濡らしたという事実には違いなかった。「んぐぐぐぐ……」

ずぐっとトウモロコシを挿入されて、エレンは呻いた。悲鳴はあげなかった。太腿の筋肉が緊張して――そうすると痛みが増したので、エレンは意識して力を抜いた。

トウモロコシを引き抜いては、いっそう深く押し込んでいくチャールス。トウモロコシが血に染まっていく。

「うぎいい……」

トウモロコシにまぶされた塩の粒に、引き裂かれたばかりの膣口をザリザリとこすられて、喰いしばった歯の間から苦鳴が押し出される。

トウモロコシの先端が穴の奥に達したところで、チャールスは手を止めた。敷き藁に少女の頭を埋めて身体を斜めに倒してから、最後はどさっと投げ出した。

チョッキから取り出した懐中時計を見てふうっと吐いた息は軽い満足なのか、虐め足りない不満なのか。忙しい朝の時刻に、農園主がいつまでも奴隷にかまけている暇はない。後ろ手に鎖で縛られた母娘を置き去りにして、農園へ引き返していった。

主人の姿が見えなくなるとすぐに、エレンは身体を曲げて太腿の間にトウモロコシを挟んだ。そのまま伸びをすると、トウモロコシはすぽんと抜けた。

ジェニイのほうは、そう簡単にはいかなかった。どうもがいても、根元まで埋め込まれたトウモロコシを吐き出せない。ジェニイは口のトウモロコシを吐き出してから立ち上がって、脚を開いた姿勢で何度も飛び跳ねた。ジャラッジャラッと、腕を扼した鎖の音が小屋の中に響く。半分ほどトウモロコシが顔を出すと、あとはエレンと同じやり方で引き抜けた。

「エレン、こっちを食べなさい」

ジェニイは口から吐き出したほうのトウモロコシを娘に譲ろうとした。

「いらぬ。ご主人様にいただいたのを食べ

る」

エレンは腹這いになって、土間に転がっている血まみれのトウモロコシを横に啜えた。ばりばりと、歯で粒をこそげとっていく。粒の間に残っていた塩と自分の血で味付けされ土にまみれた生のトウモロコシは、食事どころか餌にも値しない代物だった。咀嚼するごとにじやりじやりと口の中が鳴って、しょっぱくて鉄臭い味が口中に広がった。そのぱさついた食感を、エレンは吐き気をこらえて嚥下したのだった。

そんな娘の様子を見て、ジェニィも自分の子宮まで犯した異物にかぶりついた。ジェニィは半分も食べないうちに、気分の悪そうな顔で身体を起こした。エレンのほうは、与えられた餌をきちんと食べるのも奴隷の務めだというように、時間はかかったが一本丸ごとを食べてしまった。

——陽が昇り冲天に達してまた傾き始めるまで、ふたりはまったく言葉を交わさなかった。

ジェニィは、娘の葛藤を理解していた。

白人だけが神に選ばれた人間であり、黒人

は下等な存在だと——父親の思想、いや信念を無条件に受け容れて、そのとおりに行動してきた。その自分が実は黒人の血を引いているとわかったからといって、簡単に信念を変えるわけにはいかない。あえて奴隷としての運命に甘んじなければ、生まれてから昨日までの自己を何からなにまで否定することになるからだ。

ジェニィはといえば、白人も有色人種も同じ人間だと考え、夫の機嫌を損ねない範囲ではあったが、奴隷たちに優しく接するよう心がけてきた。自分も八分の一だけ黒人の血を引いているのだという忘れかけていた記憶が、信念の形成に大きく影響していたのかもしれないが、それはともかくとして。奴隷の境遇に墮とされたからといって、彼女は彼女であり続けることができた。元夫と義理の息子に隷従したとしても、それは娘を守るためだった。

もしジェニィひとりの問題だったら。断固として反抗をつづけて、尊厳とともに縛り首にされる道を選んだかもしれない。しかしそれでは、自分に向けられるはずの鬱憤や怨恨

を娘に負担させる結果となるだろう。母親としては不可能な選択だった。

その最愛の娘が、落ち着かなさそうに腰をもじもじさせている。粗相をして見つければ、折檻の口実をチャールスたちに与えてしまう。

ジェニィは立ち上がって小屋の隅へ行き、桶を跨いでしゃがんだ。

娘に範を示すためとはいえ、羞恥がともなった。ちよろちよろっと股間から水があふれるまでに一分はかかった。小さな水流は最初尻に伝わって落ちていたが、すぐに音を立てて桶を打ち始めた。放尿が終わると、そのまま立ち上がる。腕を縛られていては跡始末はできない。

ジェニィが元の位置に腰を落とすと、エレンが桶に駆け寄った。またぐなり、じゃあじゃあと派手な音を立てる。桶に溜まった尿が跳ねて太腿を汚したが、不快な顔をする以外にどうしようもないのだった。

二日目の朝は、奴隷監督の部下が給餌に訪れた。雇主のような弄虐はせず、四本のトウモロコシを母娘の裸身に投げつけただけだっ

た。排泄桶の処理と小屋の掃除は、連れてきた老翁の仕事だった。

母娘は腕を扼していた鎖をほどかれ、あらためて手首を小さな木枷で後ろ手に拘束された。同じ部位を圧迫しつづけて壊疽を起こさせないための処置だった。

この日、母娘は何度か短い会話を交わした。

三日目にもなるとエレンは、これまで知らなかったチャールスの悪行をいろいろと知ってしまった。彼の異常な性癖の犠牲となったのは、メグだけではなかった。

最初に下腹部への焼印を施されたのは、チャールスの異母妹で黒人夫婦の養女として育てられてきたパム。もう四半世紀も昔の話だ。彼女は二年目に流産して、その直後に自殺している。

そのつぎは、今年で三十五歳になったレニィ。彼女の顔はエレンも知っていたが、三児の母となっている彼女にそんな過去があったなんて、思いもよらないことだった。

ベティという娘は、五年以上もチャールスに可愛がられていた。どんな可愛がり方だったかはともかく、チャールスの興味が失せた

あとは売り払われていった。

そして、黒人に強姦されて身ごもった白人女性に捨てられたドーラ。一年半前に奴隷市場で買われてきた娘だった。メグよりも二歳若いこの娘は、奴隷にしては小奇麗な服をたまに着ていたから、エレンもなんとなく疑っていたのだけれど。

ジェニイが知っているのは、メグの他にはこの四人だけだったが、主人の気まぐれで何度か抱かれたという程度の娘なら、さらに十人以上はいるだろう。

かつては世界で一番尊敬し愛していた人間の淫放ぶりに吐き気すら催したエレンだったが、それでも彼女は自分をたしなめるのだった。

(主人が奴隷をどう扱おうと、それは法律で許されている。たぶん神様にも……?)

——五日目。エレンの覚悟を試される夜が訪れた。

その夜。ふつうの幸せな生活がつづいていたとしたら、ディナーのあとの一家団欒の頃合いだったろうか。母娘は奴隷監督のデュースに監禁小屋から引きずり出された。首に巻

かれた鎖で引っ張られ、裸足で荒れ地を歩かされて、かつては自分たちの住家であった屋敷の、当主の寝所へ連行された。

「ああああ、あーんっ……」

甲高い女の悲鳴、いや嬌声が二階から聞こえてきた。エレンではなく、ジェニィが眉をひそめた。彼女が妻として屋敷を宰領していたときには考えられないことだった。声は、六日前までは義理の息子だったウィリアムの部屋から漏れていた。その隣は空き部屋で、廊下の突きあたりが、チャールスの居室になっている。

かつての夫の寝室は、壁に掛けられたランプが芯をいっぱい上げて煌々と灯りをはなち、サイドボードや書き物机にも臨時の灯りが置かれていた。真昼のように明るい部屋の奥には、六日前まではジェニファーが褥を共にしていた巨大なベッド。そのベッドを背にして、母娘は立たされた。まだ暗赤色の瘡蓋におおわれている焼印の痕を、チャールスが満足そうに眺める。ジェニィの股間は、針先のように短い褐色がかった金色でうっすらおおわれていたが、焼印のまわりは毛根まで死

滅したのか、まったくの無毛になっていた。
エレンのほうは、母親より色が薄いうえに元
から疎らだったので、陰毛はほとんど目立た
ない。

デュースがエレンの縛めだけをほどいてから、部屋を出て行った。

「エレオノーラ、そこで身体を洗え」

部屋の一画に置かれた大きな洗い桶をチャールスが顎で示した。

身体を洗って、それから何が起きるのかを、母も娘も理解していた。エレンはこわばった蒼白の顔で、淡いピンク色に染まった裸身を、湯桶に浸した。

「ジェニファー、おまえはこっちで儂を奮い勃たせろ」

ズボンを緩めて半勃ちのペニスを露出させたチャールスが、縛められたままのジェニイの鎖を引き寄せて、腰かけた椅子の正面にひざまずかせた。長い結婚生活のあいだ、一度も夫の破廉恥な要求を受け入れなかったジェニイが、むしろいそいそと、チャールスの股間に顔をうずめた。チャールスを啜えて、命令されるまでもなく舌を動かし始めた。

エレンは母の痴戯を横目に見ながら、今にも泣き出しそうな表情でボディブラシを使っていた。母の意図は、痛いほどわかっていた。口唇淫戯で暴発させてしまえば、五十歳を目前に控えたチャールスのことだ。実の娘への今夜の凌辱は果たせなくなるかもしれない。

けれど、それを期待してはいけない。ご主人様があたしを望まれるのなら……真心を込めてそれにお応えするのが、奴隷の義務なんだわ。エレンは、本気でそう思っていた。

果たして。チャールスは古女房だった牝奴隷に精気を吸い取られるようなへまはしなかった。十分にいきり勃ってくると、髪をつかんでジェニィを引き剥がし、萎えてくるとまた口唇奉仕を強制した。

エレンは最後に、股間を指で洗った。メグに恥垢を舐め取られた羞恥を忘れてはいなかった。それから、洗い桶から出てタオルで全身をぬぐった。

エレンが身体を拭いているあいだに、チャールスも裸になっていた。大きなベッドの真ん中に仰向けに寝転がって、エレンを呼びつけた。

「来い、エレオノーラ」

白人にとって、奴隷は通称でしか認識されない。アルの本名がアルフレッドでもアルバートでもアレックスでも、白人には関係がない。それなのにわざと正式名を使うことで、チャールスは母娘を辱めようとしているのだろう。あるいは、限りなく白人にちかい実の娘を犯すという背徳の愉悦に耽っているのかもしれない。

エレンは、ちょっと迷ってからタオルを捨てた。一糸まとわぬ姿で、ベッドの脇に立った。

「来いと言っておるのだぞ」

チャールスがまっさらのシーツを軽く叩いた。

「ここへ来て、儂を跨いでひざまずけ」

タオルを捨てたときよりも長く逡巡してから、エレンはベッドに上がった。

「失礼いたします、ご主人様」

馬鹿丁寧に断わってから、エレンは男を跨いで膝をついた。

ジェニィは最初にフェラチオを命じられた椅子の前にひざまずいたまま、全裸の父娘を

喰い入るように見つめている。元夫の冒瀆を諫めても、彼の怒りを招くだけだった。自分だけならともかく、娘にもとぼっちりが行きかねない。そして娘をたしなめたところで、主人への不服従をそそのかす奴隷女の言葉に従うはずがない。むしろ依怙地にさせるだけだろう。ジェニィとしては、ただ見守るしかないのだった。

「自分で挿れろ」

簡潔な命令。エレンはきよとんとした。

「何をどこへ突っ込むか、もう知っているな。自分で挿れろ」

エレンの蒼ざめていた頬が、ぱあっとピンク色に染まった。表情を封じて宙に据えていた瞳が、羞恥と屈辱に揺れて弱々しく男を見下ろした。

「はい……ご主人様のおっしゃるとおりに致します」

内心の動揺を隠して、エリイはちいさくつぶやいた。腰をすこし沈めて前へ突き出し、尻の後ろからまわした右手で怒張を握った。

(あ……)

掌に包んだ瞬間、びくんと太さを増した怒

張。それを秘裂に導いて、左手で花卉をくつろげた。腰を前後にずらして、盛り上がった肉に囲まれた小さな穴に怒張の先端をあてがった。エレンは腰を沈めて怒張を穴へ迎え挿れようとした。しかし、母親が懸命に塗りまぶした唾は、すでに乾いていた。潤いのない膣口はわずかな侵入にも、激痛をエレンに訴えた。

「くう……」

それでもエレンは腰を落とそうとするのだが、膝がいうことをきいてくれない。

「ご主人様、もう一度わたしにコックを舐めさせてください」

見かねたジェニィが、羞恥をかなぐり捨てて訴えた。

「駄目だ。おまえは、そこで見ている」

そのやり取りを聞いて、エレンは自分がするべきことに気づいた。

「それじゃご主人様……あたしが舐めさせていただいてもかまいませんか？」

「何を舐めたいのだ？」

「あの……ご主人様の……コックを」

「そんなに舐めたいのか？」

チャールスにしてみれば、小娘を軽くからかっているだけだが。エレンは言葉のひとつひとつを、羞恥に悶えながら喉から押し出している。

「は、はい。どうしても、コックを舐めさせていたきたいんです」

「そんなに欲しいのなら、あとでくれてやる。まずは、とっとと挿れてしまえ」

「……………」

はしたないお願いの理由を、チャールスは百も承知していた。それを拒絶するというのだから――少女に不必要な苦痛を与えようという意図があるのは明白だった。

エレンはあらためて、はっきりと、この男が自分たちを憎んでいるのだと思い知った。

（それでも……あたしは、この人の奴隷なんだ。ご主人様の命令に逆らってはいけない）

ご主人様を恨んじゃいけない。どんなにひどい命令でも従順に受け入れて、真心を込めてご奉仕すれば……

（可愛がっていただけるようになる……きっと）

白人としての思考に、少女は呪縛されてい

た。白人が求める『良き奴隷』になろうと、最初の日の決意をけなげによみがえらせた。

「……コックを挿れさせていただきます」

エレンは息を止めて、グランドキャニオンに身を投げるほどの悲壮な覚悟で膝の力を抜いた。

ぎちぎちっと内側を激しくこすられる痛み。ぐうっと細い穴をこじ開けられる痛み。ずんっと奥底を突き上げられる痛み。それらがひとかたまりになって爆発した。五日前の破瓜と変わらない激痛だった。いや……自分で自分に与えた苦痛だという思いが、痛みを倍加させていた。

「エレン……空いている手で、自分のクリトリスを刺激しなさい」

ジェニィがとんでもないことを言った。

「そうすれば、自分のそこも潤ってくるのよ」

避けられない受難なのだったら、せめて肉体の苦痛だけでも取り除いてやりたいという思いから発せられた言葉ではあったが。ずっと昔に厳しく叱った行為を、今のジェニィは娘に勧めていた。

エレンは花卉をくつろげていた左手を上へ

ずらした。クリトリスという単語を聞いたのは初めてだったが、それがどこを指すかは直感していた。

小さな皮の隆起にそっと触れただけで、おしっこを漏らしそうな感覚が奔った。それは、たしかに快感だった。メグにされたことを思い出して――エレンは二本の指で隆起を挟んで、おそるおそるめくってみた。

「ひゃぶっ……」

尖鋭な快感が背筋を駆け上がった。股間が熱く潤ってくるのが、はっきりわかった。

小さな穴を無理に拡張される苦痛と、小さな突起がもたらす純粹の快感。エレンには、そのふたつが同じ部位から発しているとしたか感じられなかった。相反する感覚の拮抗。そのどちらを優勢にしたいか、そのためにはどうすればいいか。エレンは、剥き出しになった肉芽の突端に軽く指で触れた。刹那……快感が苦痛を凌駕して、エレンはぶるっと全身を震わせた。

「主人を差し置いて、ひとりで遊ぶとは何事だ」

チャールスが両手を上へ突き出して、目の

前の小ぶりの乳房を強く握った。性的に未熟な少女の自流行為に興味を覚えて、主人の許しを得ない振る舞いを黙認したのだが、勝手に気持ち良くなられては面白くなかった。

「腰を動かせ。儂を愉しませろ」

エレンは稚ない官能から引き戻されて、あとには苦痛だけが残った。そこへ、乳房の痛みが加わる。

つかまれた乳房を中心に弧を描くように、エレンは腰を浮かした。ずるうっと……内臓を裏返されるような、鈍い痛み。

(これくらい……平気。我慢しなくちゃ。ご主人様を愉ませて差し上げるのが、あたしの務め)

エレンはさらに踏ん張った。ずずっと、膣口が押し広げられる。先端の付け根の部分(エレンは、性器の一部を指す単語を知らなかった)が抜け出ようとしているのだと、感じられた。抜いてしまうと、また挿入で苦勞する。

(頑張れ……だんだん気持ち良くなるはず)

耳年増目年増のエレンは自分を励まして、腰を沈めた。

ずぶっ……濡れかけた肉穴を奥まで貫く音。

「もっと早く動け」

チャールスの指が、乳房に喰い込んだ。

「ぎひ……はい……」

エレンは乳房の痛み能耐えかねて上体を倒し、両手をチャールスの肩に置いた。チャールスは、手をどけろとは言わない。かわりに、乳房をもぎゅもぎゅもぎゅと、リズムカルに圧迫した。

「あう……うんっ、ふっ、うんっ……」

エレンは両手で体重を支え、乳房の痛みに合わせて膝を屈伸させた。

ずぐ、ぬぷ、ずぶ、ずっぷ、ずにゅ……

エレンの腰が上下するつどに、そこからこぼれる音が湿っていく。痛みが薄れていって、内側からの圧迫感だけが残った。快感は、なかった。エレンにとってそれは、単に膝の疲れる器械的な運動にすぎなかった。

「後ろ向きになれ」

チャールスが乳房から手をはなして、エレンの腰を支えた。エレンは命じられるままに、股間を穿つ肉棒を中心にして身体を半回転させた。そして上下運動を再開する。腰をつかまれたままなので、身体を前へ倒せなかった。

直立させたまま、全体重を支えて膝を屈伸させた。

「あん……？」

肉棒の先端で下腹部の内側をこすられて、エレンは初めてなまめかしい声を漏らした。クリトリスから放射される鋭い快感ではなく、腰全体にじわっと広がるような——これまでに経験したことのない感覚が、かすかに起こったのだ。

(だんだん気持ち良くなるって、このこと?)

好奇心に駆られて、エレンは腰を上下させた。しかし、同じ感覚はよみがえらなかった。腰を突き出してみたり引いてみたり。肉棒の当たる角度を変えても駄目だった。

わずか二度目の性交。トウモロコシによる凌辱を数えても三度目。エレンの肉体は、開発される下地すらもととのっていない。抽挿を苦痛と感じなくなっただけでも上出来といえるだろう。

未熟な少女が自発的に、しかも熱心に腰を振っているさまは、それはそれでチャールスの嗜虐癖をそそったらしい。それとも、苦痛を与えられなくて興が醒めたのか。チャール

スは身体を起こして少女の背中を強く押した。つながったまま、四つん這いの後背位へ形を変えた。背後から乳房をつかんで少女の身体を持ち上げ気味にして。

ぱんぱんぱん……と、腰を強く打ちつけた。乳房をつかむ手が腰と反対に動いて少女を揺さぶる。膣口から奥底まで、亀頭が荒々しく往復を繰り返した。

「あっ…あっ…あっ……」

喘ぎというよりは、腹を押されて自然と漏れる息だった。

ずっちゅ、ずっちゅ、ずっちゅ……粘っこく湿った抽挿音が、声に重なる。

「うおっ……」

チャールスが動きを止めて、野太い呻きを漏らした。腰がぶるっと震えた。

「ふう……いい具合にこなれてきおった」

チャールスは少女の尻を叩いて向きを変えさせた。自分は、ベッドにごろんと仰向けになって、組んだ両手を枕がわりにした。

「跡始末をしろ」

エレンは、最初の夜に姉がしていた行為を思い出した。四つん這いのまま足元からにじ

り上がって、チャールスの下腹部に顔を近づけた。

(へええ……?)

こんなにも間近く男性器を観察したのは初めてだった。女性器の複雑怪奇な形状に比べると、実にシンプルだった。これのどこに、自分をあんなにも苦しめた凶暴さが隠れているのだろうと、それが不思議なほどだった。が、そんな感想は一瞬のこと。先端の小さな口からこぼれている白い涎を、エレンは舌で舐め取った。しょっぱいような、いがらっぽいような、ねとつとした感覚が舌先に絡みついた。獣じみた生臭さが鼻をついた。

エレンは唾をためてから、舐め取ったものを飲みこんだ。それから息を止めて、シンプルな凶器を縦に半分ほども口中に含んで、丹念に舐めた。

ぴちょぴちょ、くちゆくちゅ……かすかな音が唇から漏れる。エレンは本能的に、先端部の張り出したあたりを集中的に舐めていた。

最後にエレンはチャールスに命じられて、太いストローを吸うように、頬をすぼめて肉棒の中に残っている精液を啜り取った。それ

も、唾と一緒に飲みこんだ。

チャールスは身体を起こしてサイドテーブルの呼び鈴を手にとると、チリリンと軽く鳴らした。

「お呼びでしょうか？」

ジェニファー付きだった女中が姿を現わした。小さな呼び鈴の音を聞きつけたのだから——この女中は、部屋の中で起きたことをすべて聞いていたことになる。

「ハムを持ってこい。ステーキの厚みで一枚だ」

ベッドから下りて身づくろいを始めるチャールス。

いつまでも奴隷がご主人様のベッドに居座っているのは行儀が良くない。そう考えたエレンはベッドから下りて、母親と同じようにひざまずいた。

女中がハムを皿に載せて戻ってくると、チャールスはそれをエレンの膝元に放った。

「今夜は上出来だったぞ。褒美だ、食え」

この五日間、一日に二本の生トウモロコシしか与えられていなかった。以前は日常的に食べていた脂っこくて塩味の濃い肉塊が、エ

レンの目にはきらきら輝いて見えた。

「ありがとうございます」

エレンは迷うことなく、四つん這いになってハムを口に咥えた。

「あ……」

母親の小さな驚きの声は、エレンの耳に届かなかった。

ハムをがぶりと噛み千切ると、脂肪のねっとりした甘みが口いっぱいに広がった。地獄の底で味わう一瞬の至福。エレンは、一枚のハムをががつと貪り食った。

「家畜としての心構えが、身についてきたようだな」

チャールスが、驚いたことに微笑さえ浮かべてエレンの頭を撫でた。

「手を使おうとしなかったのは、おまえが初めてだ。なぜだね？」

なぜだろうと、エレンは自問した。

「あの……ご主人様がおっしゃったように、それが家畜にふさわしいと思ったので」

ほとんど反射的に身体が動いていたのだが——言葉にしてみると、そういうことだった。白人としてのエレンの論理が、奴隷としての

エレンの肉体を動かしたともいえる。

「これからも、その心がけを忘れぬことだな。
おまえも、娘を見習え」

最後の言葉は、ジェニィに向けられたもの
だった。

彼女は目を伏せて黙っていた。